Fate/kratos 第四次聖杯戦争にクレイトスを招いてみた

pH調整剤

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――何故。何故、神は私を救わなかった。

仇敵を滅ぼすも身内殺しの烙印はなお消えず、身を焦がす絶望に押され、オリュンポス山から身投げをするクレイトスはふと気が付くと間桐雁夜にバーサーカーとして召喚されていた・・・。

果たして真の救済はクレイトスと間桐雁夜に訪れるのか。

＊本編で持ち上げられて叩きつけられた雁おじと虐殺白ハゲコンビに注目してご覧下さい。

あっ、単独行動はデフォです。

目次

【ネタバレ注意】ぼくのかんがえたさいきょうのくれいとす【ｐｔ４を読了してから推奨】 1
序曲 5
召還 12
邂逅 25
強襲 41
強襲・ｐｔ２ 54
強襲・ｐｔ３ 63
強襲・ｐｔ４ 73
強襲・ｐｔ５ 89
余波 108
払暁 119
動脈 135

【ネタバレ注意】ぼくのかんがえたさいきょうのくれいとす【ｐｔ４を読了してから推奨】

バーサーカー
マスター：間桐雁夜
真名：クレイトス
性別：男性
身長・体重：不明
属性：混沌・中庸
～基礎パラメーター
筋力：ＥＸ
耐久：Ａ＋
敏捷：Ａ
魔力：Ｃ
幸運：Ｄ－
宝具：Ａ＋＋

～クラス別能力～

狂化：Ａ＋＋

幸運パラメーターを除き、保有スキルと全ての基礎パラメーターをＡ＋＋に統一する。

ただし、一度発動すれば狂化はサーヴァントが消失するまで無効化できない。

～固有能力～

精神汚染：Ｂ－

高度の精神汚染。

精神の錯乱が見られるが、狂化の打ち消し合いで意思疎通レベルなら精神汚染を持たぬ者でも可能。

心眼：Ｂ－

精神汚染、狂化によってランクダウンしている。

相手の実力人格判別、一つの道を究めたものによる、副次的な簡易な武術、戦術の心得など。

例え圧倒的な絶望の淵に落ちても冷静さを喪失せず生存力を伸ばす事ができる。

それが殺害を目的をした場合なら心眼をＡに補正する。

スパルタの血筋：Ａ
スパルタ式の教育により培われてきた、闘争本能、天性の才覚。
基礎パラペーターの内、幸運パラメーターを除き、ランダムでＡに補正する。
また騎乗スキルＡ相当を追加することができる。
ただし発動条件は確かではない。
神性：Ａ――
雷帝ゼウスの直系の息子であるが、本人の強い血の否定の信仰によってランクダウンしており、無いに等しい。
本来の場合、最高位の神霊適性により、神獣、竜種、その他の幻獣をＥＸクラス相当の騎乗スキルで乗りこなす事ができる。
自由に使い魔として使役可能。
さらにゼウスの知名度補正を行う事が可能。その場合、全パラメーターをＡ＋＋＋に補正する。
そしてランダムで三つのパラメーターをＥＸに補正する。
また他サーヴァントから奪った宝具をＥＸ相当で使いこなす事ができる。

～宝具～

ブレイズ・オブ・カオス：Ａ＋＋　レンジ：１０　種別：対人宝具
軍神アレスとの契約で賜った、鎖型の剣。
多数の魔物と人間を切り伏せたことにより、怨念が染み付いた魔剣となっている。
魔力がＢ以下の場合、Ｂ相当の単独行動スキルを付与し、魔力をＡとして補正する。
ただし能力を付与してから、８０ターンを限界とする。
サーヴァントの魔力が欠乏した場合ターン数をリセットする。
相手サーヴァントに神性があり、Ｃ以上の場合、１５ターンの麻痺効果を与え、パラメーターが上昇することによって捕縛率を変動させる。
ＳＴ判定に失敗した場合、Ａ＋＋相当の追加ダメージを与える。
対魔力がＢ以下の場合、Ｂ＋相当の追加ダメージを与える。
精神汚染を保有する場合、どれかのパラメーターランクを一つ下げる。

序曲

――何故。何故、神は私を救わなかった。

天を頂き万物を睥睨する、オリュンポス山から望む眺望はまさに息を止めるほどの荘厳さであった。

だが、この縋り付くべき神にすら憎悪に近い失望をありありと感じる男には屑塵に観察している事に等しかった。

男の名は「クレイトス」

かつてスパルタの一兵卒として美しき大地を屍で埋没させ、殺戮と血潮で歴史を構築し描写してきた。

戦の神にして神の戦駒（ゴッドオブウォー）、神の戦争（ゴッドウォー）。

彼こそが戦争であり、戦争もまたクレイトス。闘争の根源を知り尽くした戦神。

軍神アレスは名状等共に、誠忠対象であり、彼の神生（じんせい）に始まりと狂いを与えた。

アレスの姦計に惑わされたのが悲劇の始まりであった。

地面に溜まった水に顔を映す。水面が示すのは白く濁った鼠色に染め変わっている顔面の形相。

これが愛すべき妻子を自ら手に掛け、殺害したと咎を責める罪の聖痕だった。
己の血の一滴を振り絞ってでも殺すべき、復讐敵のアレスを誅殺してもなお未だに得られぬ贖罪と救済。
しかも戦利品で手に入れたのは、罪を赦すとのただの一言のみ。
その言葉は億の兵隊の襲撃より痛烈であり、もしも受け入れぬのであれば頭を砕くと宣告されてもクレイトスは首を振らないだろう。
心霊をなお耐え抜く自意識の責め苦と慟哭に身を震わせながらクレイトスはブレイズ・オブ・カオスを執る。
「やはり戦争か、私には戦争しかないのか」
まるで誰かに語りかけるように、苦渋を吐く。
当然、クレイトスの周囲にあるのはオリュンポス山の叢叢たる木々、岩塊と見下ろす太陽(ヘリオス)のみである。
痛みを解放するのは別の痛みのみ。剣で肩肉を裂かれようが、鏃を腑に打ち込まれようが構う物か。
熱を極大温度で焼き潰し麻痺させる、スパルタ流の思考方式は無意識にまた戦争を要求していた。
あの女(アテナ)もまたこれを俯瞰しているのだろうか。

言われるがままに従属し、下命を仰いできたがこれまでだろう。
あるはずの無い救済を見え隠しして散々欺いて来られたが、これまでだろう。
無かったのだ。救済など。
本心では理解していたのかも知れない。
戦場で血も凍るような冷酷を振りまいておきながら、スパルタがこの体たらくか。
自分の内包していた恥と断言するべき脆弱さを嘲笑いながら、大地を踏みしめ、飛んだ。
我が最愛の妻よ。そして、娘（カリオペ）、済まなかった。

こんな私を……。

誰にも届かぬ戦士の懺悔は、オリュンポスの静謐と風切音に溶けて消えた。

「ぐあ゛あ゛あ゛あ゛アアアアアアアッアアアアアアアアアアアアアア」

刻印虫植付(きせい)約365日目の、間桐雁夜は今晩も痛覚神経を直接鑢で舐められる如くの刺痛の嵐に絶叫と共に飛び起きた。

激痛で引き起こされる過呼吸で窒息死しそうな、苛烈な副作用を”マシ”と思えるだけの耐久性が付いてきたようだった。

慣れた手付きで酸素ボンベを口に直結し、酸素を肺胞に送り込む。

呼吸の拍を整調すると、未だに体を刺す疼痛に身を捩じらせながら水を胃に流し込んだ。

いっその事、窒息で気絶した方がよかっただろうか。

いやそのまま死神に誘われる、リスクを考えたら起きて正解だった。

刻印虫の蠕動は神経に溶岩を注射した方が遥かに思える苦痛の臨界点。

時々、痛みで暴れまわるなら気絶して昏睡するが最案として採択したくなる。精神の秤役が痛みと命を掛けて前者が重いと判別したらしい。

だが精神で分かっていても、本当の錘が俺を支えている。だから死ねない。簡単に苦しみから逃れられない

あの娘の今置かれてる史上最悪の状況に比べたら、俺の状況なんて取るに足らないノミほどの些事だ。

そう自分を気丈に鼓舞し、月明かりが入り込む窓に身を寄せた。
また……あの夢か。何回目だ？一体。
近頃は例の夢と刻印虫の激痛による、起きる寝るを反復横飛びしていた。
満月とも劣らず恨めしいほど金色に輝く、小望月を見据えながら夢を思い返す。
あの男は絶望していた。何も得られなかった復讐に。そして欺瞞の救済にも身を投げ捨てる自殺で救われたのだろうか。意味の無い夢問答に答えを見出せずふと、甲に月光を翳す。
蠢いた。
皮膚にくの字が縦断する。虫が光源に反応したのだ。今この身になってはなんて事のない有り触れた現象。
初見の人間が見たらきっと腰を抜かすだろう。
植え付け初期の頃は痛みに耐えることで見ることすらしなかった己の変貌した肉体。
自分でも気味悪く思わないのが不可思議に感じた。間桐の門に踵を返してから虫の存在すら呪っていたというのに。
度し難い。
——虫が塊が今の俺だなんて。
今、あの人が俺を見たらなんて言うんだろうか。考えただけで心臓が緊張で握り潰れ

そうになる。それでもあの人なら手を差し伸べてくれるだろうか……。
守る対象に救いを求めるだって？恐ろしく無様だ。間桐雁夜。
そう雁夜は己が守るべく対象に縋る、間抜けさを自嘲した。
葵さん、凛ちゃん。そして桜。
俺がこの這いずるウジ共を体に埋め込んだ理由。救わなきゃ絶対に。あの賤賊の魔術師共から。
そして時臣…。
お前を地獄に叩き落してやる。絶対に
雁夜がそう心に憎悪の火を灯すと、顔に浮き出た巣状の聖痕を硝子に投影した。
そして、間桐雁夜に深紅の令呪が宿ったその晩。
間桐邸の吝嗇の欠片も無い、居間の一室で腰掛けていた吸血鬼は人知れず歯を覗かせるように笑みし哄笑した。
老齢では考えられぬ白き透き通った歯は芋虫の体色、また、繭の色を思わせた。
「良きかな。良きかな。時は満ちた、油は注がれた。戦争の釜は空いた。後は何が足らぬ？トオサカ。アインツベルン――」
「貴様らの死　だ」
間桐で幾年以上時間を知らせ続けた、暗色の埃被った古時計だけがそれを見つめてい

た。

召還

一見然したる変化の見られないと訝しげる月が、小望月が十六夜と呼ばれる満月形に移り変わったいた頃。
間桐雁夜は邸宅の苑地から、月見に浸っていた。
別にストレス解消のアウトドアで夜更かししているわけではない。
臓硯に令呪が備わったらその翌日の丑三つ時が召還の儀と予め聞かされていたことによる、時間つぶしの一環だった。
どうせ寝ようとしても、苦痛で満足な睡眠が取れるわけが無い。
だったら夜風に当たっていた方が時間の有効活用だと。
しかし辺りを見渡して、苦悶の表情を浮かべる雁夜。
庭園は誰が維持してるのかは、まったく既知の外だったが、
景観は雑草類が生え茂り、樹海と見間違うほどに荒れ果てていた。
間桐家秘伝術の総本山、地下蟲蔵を隠匿するために放置したとは流石に断言できないだろう。
確実にあの吸血鬼の無関心が原因である。

まだ魔術の門に蔑視を投げかけるほど前の、幼い頃はよくここで兄の鶴野と鬼ごっこなどの遊びに興じたものだが。

そんな加齢特有の懐古か。

刻印虫に記憶系統まで乗っ取られた数少ないメリットか。

人間時代では思い出す事すらしなかった郷愁感を味わっていた。

だが我が肉体は確実に劣化の一途を辿り、軋みを上げ始めていた。

皮膚感覚は常時も小火で炙られる近い、幻火に襲われている。

このジャケットの一つでも欲しいだろう夜更かしの月見は、服など要らずと押し通せるまで

深夜固有の”正常”な寒冷を認識できないほど温度器官が壊死しつつあった。

まぁ、疾患の寒気は忘れたように時々来るのだが。と本人にしか分からない注釈を心で付けた。

そして、どうせだったらそれも死んで欲しかったと、あまりにも粗末な願いを闇空で瞬く星に願った。

さて、臓硯が満面の破顔で待ち構えている重要任務召還の予定時刻が差し迫っていた。

だが雁夜は何を悩みの種を開花させているのか、間桐家の庭園から動けずにいた。

桜……。

雁夜の心中をざわめかせているのは、己が地獄に飛び込んだ端緒。間桐桜についてだった。

自分の思い人の禅城葵。

その娘として生を受け、禅城の奇跡とも言える母体の特性を受け継ぎ過ぎた奇貨故に、奇禍に落とされた不幸な少女。

深夜の黒と月の青が混ざった盲いの闇がりですら、地面からその邪悪たる存在感の黒縁を浮かび上がらせ、陰陰滅滅と自らを主張する蟲蔵。

その邪悪の片鱗を感受したのか、吐き気が胃を締め付ける。

そこで教育と名ばかりの拷問に落とされている彼女は何を思うのか。

無辜だと退ける手段すら持たず、魂を犯しぬかれる日々だけを積み重ねている。

この転換点と言えるこの夜。

雁夜は何か彼女を少しでも安楽させてやりたい、御節介を思案していた。

何か安心させてやれる言葉は無いだろうか?と。だがライターとして売文を商っていた雁夜でも今の状況では何を語りかけても、心の欠片を踏みにじるような気がしてならなかった。

臓硯もこの日だけは絶頂の真っ最中であり、日々目を光らせている桜との接触を徒に

監視したりしないだろう。
　つまりチャンスなのだ。この夜だけ。その絶好の機会にも限らず、言葉が出ないという失態に己の無能さを殴りつけたくなる。
「君を絶対に救う」
「だから希望を持って」
　そんな陳腐で吐瀉物を吐き掛けたくなる言葉だけが脳中を旋回する。
「クソッ……！」
「おい、雁夜！何をやっておる――」
　ついに来てしまった。タイムオーバー。天から下賜された金は錆び朽ちた。
「五月蠅い――先に行ってろ吸血鬼」
　思考を強制中断し計画を不意にされた所為で、躁急に憎憎しげに吠えた。
　顔面の虫達が轟き憤懣を表明する。
「フム……？この日がお前の人生の中で、億万秒時間の中で肝要な夜だと何回も伝えたはずだがな」
　吸血鬼はたじろぎもせず、生い茂る草木に立つ樹木の枝に腰掛け、状況的にも物理的にも見下ろしながら、出来の悪い子を叱咤した。
「さては雁夜…貴様……？桜に相見しようとしてたか？」

正眼を撃たれた衝撃で雁夜の心臓が暴れまわる。まさか全て見抜かれていたのか？黒色に輝入った肌が恥ずかしさで高潮した気がした。

「……」

「悪事を見抜かれた時、歯を食いしばりふて腐れるのはいつものお前の癖だな――雁夜よ」

無言の圧力を飛ばし、臓硯視点では叱ってくれとさえ感じ取れる息子にほとほと呆れていた。

こんな愚人で魑魅魍魎が跋扈する聖杯戦争に勝ち残れるのだろうか。出来の悪い息子を慮る怪物に残留した親心がそう痛感していた。

先ほどまで芝居役者のように呪いの言を振りまいていたのを、ひそかに観察し愉悦に染まっていた臓硯には巡らすまでも無い推理以下である。

「召還用の陣と聖遺物は既に用意万端整っておる」

「後はお前だけだ―雁夜…遅刻するな」

そう釘を刺し荒庭を後にした。

――今宵だけは宥恕(ゆるし)してやろう。記念すべき夜だからな。

魔の夜が密かに祝福したのか、一陣の風がそう雁夜に幻聴したというのはあまりにも都合が良すぎるだろうか。

雁夜もまた唇を噛みながら、戦場の前夜へと吸い寄せられていった。
地下蟲蔵へ向かうには回廊を経由せねばならない。間桐邸へ居住する人間だけはそれを知っているし普遍の知識である。
人外化した雁夜も例外ではない。家主の成金振りを証明する、絨毯の形をした鮮血色の札束はまるで血の道のようだった。
地獄への淵が近づくにつれ、脈拍が上下を振るい身体を痙攣させる。戦争への意欲を象徴する武者奮いだと感じてみたがったが、どうもそうでは無いらしい。
極度の緊張を虫達が傷害を受けていると勘違いし、体の組織部再生を実行していた。言うとならば苦痛が風邪で言うウィルスを殺す熱のようなものだ。
無駄な事しやがって…。そう勝手まま振舞う己の体に怒りを感じながら、苦悶で喘ぐ体を引きずるように必死で蟲蔵へと足取りを向かわせる。
刹那、心臓が硬直した。虫の所為ではない、その仄暗い廊下で亡霊のように立ち尽くす――少女がいた。
「桜……ちゃん?」
驚愕の余韻で、つい呼び捨てしてしまいそうになるがなんとか耐えた。
「やぁ、桜ちゃん…びっくりしたかい?」
かつては美しき花園の天使と呼べた少女は、何時しか冥府の死人へと変貌していた。

首には不可視の首輪と鉄鎖が巻かれて餓鬼が血塗れの白骨を咥えている絵面が脳裏に浮かんだ。

落ち着け雁夜。先ほど何回も予習しただろう。この子を救う言葉なんて無駄な戯言…。そう精神系が無視を促し指令する。

「顔……どうしたの？」

顔？疑問符が浮かぶがすぐ解決に昇華された。怖いんだな顔が。口では他愛も無い返答ししばらく会話を続けていた。

無味乾燥、無毒無薬。何の自体も呼び起こさない聞きなれた歓談。

またいつか遊びに行こうと、余命を無視した決して履行されない契約に判を押した。仲介人すら居ない無責任な児戯。

「おじさんはそろそろ行くね」

「ばいばい雁夜おじさん」

この二言であれほど苦慮した発言に終止符を打った。

「絶対に君を救う」

舌を切り裂かれても言うべき言葉は雁夜の心中で爆ぜ、灰に還元される。

身命を供物に変えても。俺の運命を炉にくべ、燃やし彼女の人生に焔を点火して欲しい。

そしてまたいつかあの日のように…笑ってくれ。桜。

「では召還の儀を決行する」

そう諸悪の根源、蟲蔵で高らかに宣誓し、しわがれた魔声は石壁を反響し雁夜へと伝わった。

その後、臓硯からさらに追加された注文は、狂化の属性を付与する召還だった。雁夜の魔術師としての才覚、技術、能力の無さを裏付ける代物である。

臓硯の思惑は二つあったが、その一つである狂人に刃物という、故事?がそれを一番表していた。

凡人は何も無ければ狂うしかない。死狂いのた打ち回り、剣を振るい猛る狂戦士。

強力で何者を近づけさせず、味方のすらも死体の塔に積みかせねて行く半獣半人。

だが幾ら豪然なクラスでも使う人間が無力無能ならただのよく動く的に過ぎない。的確な狂いを制御できる者こそ狂戦士を真に選ぶべき適い人であろう。

雁夜の魔術師の履歴書をしたためるなら、中退の一言が書き添えられる。いくら聖杯に令呪を采配された選抜者でも下から数えた方が雁夜の名を見つけるのは苦労しない。

この事を雁夜もよく分かっていた。さすがに魔術から逃避した事を、この時ばかりは

情けなさを懺悔し沈痛した。

「――閉じよ（みたせ） 閉じよ（みたせ） 閉じよ（みたせ） 閉じよ（みたせ） 閉じよ（みたせ） 閉じよ（みたせ）」

暗誦しておいた召還呪文の序文を口唱していく。

すると徐徐に召還陣が紫電を帯び、暗黒を裂いて舞い上がった埃が光を乱反射を開始。

英霊の世界と現世の門が雁夜を介して繋がり始めた事を告げていた。

それを目撃した臓硯も血を滾らせ、窪んだ眼窩を広げるように凝視し、口元を歪めながら眺望する。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし」

ついに狂戦士を呼び起こす呪文の段に差し掛かり、顔面の血管を興隆させ神経と虫が絶叫をあげる。

だが雁夜は詠唱を止めない。脳裏に描く少女が居る限り。

――桜。

――汝、狂乱の檻に囚われし者。

――我はその鎖を手繰者。

コイ。コッチニコイ。
天に等しい場で身投げをした、なお赦されぬ罪人は、ふと瞼を開いた。
「誰だ、私を呼ぶのは」
コイ。コッチニコイ。
上下は見渡す限り黒に白をばら撒いた、空間に男は居た。
空間は白黒と点滅し、また動きが早すぎるのかまた遅すぎるのか。
遅滞と加速を繰り返し幾何学的な模様を思わせる。
「あなたは…？」
遠景を見渡すが、疑問符を投げかけられる相手は確認できなかった。
「ここです」
長髪を靡かせ青銅の鎧を着込んだ騎士が、鼻の先に鎮座していた。
「お前は？」
「あなたは？」
鏡像を映したような質問に男は顔を歪めた。

騎士の男は表情を変えずこちらを刺すように凝視していた。
「私を呼んだのはお前か？」
「私も呼ばれました」
コイ。こっちに来い。
また声が男を呼びかける。来いとは一体なんなのか。
抽出的な言葉に戸惑う男は騎士を同じく直視した。
目線が一本の線を引き繋がる。眼窩と眼窩が互いの直線を射殺しあう瞠視。
「あなたは守ってくれますか？マスターを」
「分からない」
「正直な人だ」
「戦士は二人も要らない」
コロセ。殺意は無い。コロセ。分かった。
実態の無い勅令を承諾すると、互いは了承したように剣を執った。
頸が頸を双方の剣が食い合い。
骨が破断し、鋼が血を吸った。結果は知らず。
「アーサー（我が王よ）」

慚愧の詛(ことば)が中に舞った。首と共に

黒煙が白煙が入り混じり、蟲蔵を一気に覆う。
雁夜と臓硯は見た。
陣に不動する鉛色の長躯の戦士を。
刺青と見間違う、滴る鮮血は口で語らずとも彼を雄弁に証明し、説明した。

「――――――問おう」

かくして、戦争の神(クレイトス)は現世に召還された。

邂逅

召喚陣用として宛がわれた蟲蔵は非常事態に襲われていた。
白煙が完全に晴れ、雁夜と臓硯が視界を取り戻した頃。
陣の内にその非常事態の”原因”が直立の不動のまま、こちらを剣呑とした表情で見据えていた。
その灰色の長躯から威圧される雰囲気は、確実に殺意の類であり、背に身拵えしている鎖鎌の状の兵装が警告の金音をしゃらりと発した。
「――――問おう」
白に朱の墨を入れ抜いた岩盤のような顔が動いた。
幾千年生き抜いた物の怪ですら、あんぐりと口を解放したまま呆然と見つめていた。
「いや、問う必要などなど無いな。貴様らか…私を冥府より引きずり出したのは」
「そ、そうだ。俺が呼び出した」
驚倒し尽くし地面に手を付いて一部始終を傍観していた雁夜が、即座に意識を取り戻し従僕を召喚したマスターとしての威厳を示した。
いくら憤怒状態の怪物でも、聖杯より呼び出したのはこの自分であり、強面の格的に

考慮しても礼儀作法を受ける側だろうと。
すると刺青男は召喚陣を飛び出し、マスターの前方に歩み出し接近してきた。
無論雁夜は忠誠の意と捉えるだろう。この男の真の素性を知らぬだから。
勝手な思い込みで、時代的に通じるか不明瞭な現代用辞儀だが、雁夜は馬鹿正直に手を差し出した。
するとそんなアマチュア魔術師の甘い妄想を崩壊させるように、雁夜の首を掴み、大根抜きするが如く、雁夜の脆い体を上中に振り上げた。
「これもアテナの指示か！ふざけるなよ貴様ら！私をどこまで弄ぶつもりだ！神々の屑共め！」
そう刺青男が叫換すると、虫達は獅子に吠えられた草食動物のように、我先にと逃亡を開始した。
一気に蟲蔵が移動に伴う甲高い粘液音に支配された。
すると部屋の角に虫の集団玉が出来上がり、互いを押しつぶし合い自己保存を賭けた、生存戦争が勃発する。
当の雁夜は万力を超越した、膂力で喉頭を一気に締め上げられ、呼吸を閉鎖された故のチアノーゼが元々黒い顔をさらに黒くした。
あくまで精神は人間の身であるため、殺戮の神による憎悪の毒電波を十分に浴びせら

れた事により失禁しかける。
「おいバーサーカーよ、人語が伝わるならよく聞け」
「儂らはアテナなどという人間一切知らぬ。そしてお前が殺しかけている彼奴はお前の主人だ」
「扱いには十分気をつけろ。お前が死ぬぞ」
臓硯が環境音に埋もれながらもバーサーカーに苦言を呈した。特に雁夜を救護せずに。
「私が死ぬ？私はもう既に死んだ身だ！貴様らが冥府より蘇生させなければ安住の地で眠っていたというのに！」
刺青男は逆鱗を更に発火させ、臓硯の顔を手で掌握すると、地面に強制刻印した。
瓦礫の礫が舞い、顔の骨肉が爆散して本体の虫へと変化する。
いきなり胡桃割りならぬ吸血割りの道具に使われた、臓硯は即座に身体を再構成し、呆れ顔で反論した。
「まさかこの齢にもなって頭を割られるとは…そもそもお前は誰じゃ！何故由緒正しき触媒から貴様のような狂暴な男が出現する」
いやお前がクラスを付加して呼べと言ったんだろうが。
と素手の絞首刑から脱出した、雁夜は視界を暗転させながら心で突っ込んだ。

夢を見ていた。
あの公園の砂場で黄色い声を上げて、砂で城を建築していく二人の少女。
しばらくするとどちらが、砂城に水を流す穴を空ける権利を争い始めた。
眺めるだけで心がほぐれるような、幼少期を思いを起こさせてくれる日常に溶け込んだ情景。
自分は幼稚で懐かしい子供喧嘩に割って入った。
仲良くしなきゃなんて慣用句は子供だって聞き飽きてる。
だからこういう時はこれだ。と持参した土産を二人に配る。
すぐに顔を綻ばせ、先ほど喧嘩をどこへやら、城を穿つ諍いを、お互いのペンダントを比べ合いっこに移り変わりさせていた。
やはり彼女たちには笑顔がよく似合う。
――――くん。

柔らかく清明な人声が自分を呼んだ気がした。
声の飛ばされた場所を探すと、その人は名画の貴婦人のようにベンチで腰掛け微笑していた。
自分も急いでその人に駆け寄ろうとした。
だが、進まない。
いくら全力で走ろうとしても、その場所から一歩も前進していなかった。
時の沈泥に足が嵌ったと錯覚するほど、肩で息をする走法だろうが、決して彼女には辿りつけなかった。
彼女はあいも変わらず、にこやかに清冽な笑みでこちらが来るのを待っている。
行かなきゃ。彼女の前に。だから動いてくれよ。
あの人の前では見せられない苦渋顔になるまで全力で駆け走る。
だが決して時間の枷は外れなかった。
――――雁夜。
空が紅に染まった。日が落ちるには早すぎるので、夕暮れではない。
今にも腐敗して崩れてしまいそうな、黒紅。
この色は……血の色だ。
そして、自分を呼んだのはあの澄み切る声ではなかった。

禍々しくも厳粛を保った神に正統として許された呪い。
それは堕落さを嘲弄するような冷笑も孕んでいた。
「雁夜、君はまたおめおめ戻ってきたのか。魔道から逃げた卑怯者の分際で」
――時臣イッッッッッ
その唾棄すべきを声を鼓膜に反響させ、脳に情報が伝達した１００垓分の１秒。
小市民よろしくの人格が見神を憑依させ、積年の憤懣で心臓が裏返り、勢いあまって胸を突き破ろうとした。
噴火して間もない超高温のマグマが血管を川として激しく流れ出す。
激情の濁流は抑制を司る精神すら一気に溶解させ、マグマとして同化させた。
男の激怒を静止する時の足錠は既に存在せず、獣は獲物を念願の獲物に飛び掛らんと、頚椎をねじ切るように手を首に掛け…。
――おじさん。
全てを鯨飲する殺意が瞬時に冷却された。
あれほど荒々しかったマグマは静謐を放ち、ただの石塊へと成り果てていた。
その声の発した方向を振り返ると、そこには蟲の顔をした半蟲の化身が佇立していた。
背丈は小児とそう変わらず、外装はもちろん子供が好んで着る児童服だ。

「おじさん」
　男を無垢と幼げを含んだ声で、おじさんと呼ぶたびに、蟲顎は横開きに開閉し触覚が困惑のように揺れる。
　その複眼は異形を目視し戦慄した男の死相を返照した。
「さ……く……ら?」
「よくやったぞ、桜。それが間桐の魔術を習得した成果か」
　男が危うく殺しかけた時臣という名の茜色の紳士服を着込んだ貴人は、駆け寄ってきた怪物の頭を陶磁器を扱うように撫でる。
　その偉業を称え甲殻を包み込む優しい声は、子供を愛す父性の象徴。
「だが、遠坂の当主の座は一つだけだ。どうする?凛」
「殺します」
　まるで、普遍の事実を淡々の提示する判事は、朱石が嵌め込まれた手杖を怪物に向け…。
　獄炎を放射した。
「止めろ」
　寒汗を振り飛ばし、狂騒を破壊すべく男は泥に塗れながら疾走する。
「雁夜くん」

走れなかった。腕を回し固定するための金具化とした思い人が居たから。
「これが魔道。逃げたあなたに何が分かるの」
耳管を凍結させる冷たい囁きは、己の耳と通り抜け腑さえ凍らせたようだった。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
「やめろ」
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。お前は逃げた。
「やめろ!!!!」

世界すらもが自分を弾劾し大罪を裁くべく、罪名を叫び連呼する。
有罪。
執行の獄火は半蟲である少女の腕、脚、肩、眼球を覆い炭へと還元していく。
絹を彷彿させる髪も、あの愛らしく宝石のような目も。
蟲の屑片と混ざり黒色のタールとして滴り落ちた。
いくら男が発狂して、声が乾涸びるまで絶叫しても、中断はされない。
咎人は抗弁する権利を所有してはいけないからだ。
男の泣き叫び声は落日の悲愴曲（オーケストラ）の一楽器として追加され、燃え盛る獄炎の火打ち音が最後の旋律を飾った。
男はただ一条の烽火が天に舞い上げられていくのを、ただ眺めるしかことしか出来なかった。

「起きたか」
雁夜はあまりにも、長すぎる悪夢からようやく目を覚ました。
さすがに起床し脳が夢を現実から追い出す記憶の整理を敢行したのか、いくら傷物の悪夢でも叫びはしなかった。
ベットに寝転ぶ自分を現実だと感覚が認可したので、悪夢の記憶と不快感は霧散しつつあった。
それに先程、扼殺されかけた男が鼻先に居る衝撃でちょうど中和されたのだろうか。
昏睡から回復したのを確認すると、殺人未遂前科付きの刺青男はベットに付近に置いてあった樫作りの椅子に腰掛けた。
「あの……」
雁夜の前に刺青男が口を開いた。
「済まなかったな、まだお前もハデスの居城には誘われたくなかっただろう。あれは私の勘違いだったマスターよ」
主人を謀反で縊り殺しそうになった巨漢は、数時間前に浴びせた殺意を綺麗さっぱり掃除して謝罪した。
それにしてもマスター……？

敵意の塊は初々しく従僕であることを自ら顕示したことに、雁夜は正直溜飲を下げるより気味悪さを感じた。
風貌から比較しても主人と奴隷の立場は確実に逆だった。
ブルドックスがチワワには流石に言いすぎだろうが、先程の激情を記憶の混乱だと思えるほどの変貌である。
令呪のパスの繋がりが不完全だったことによる不具合か。
それともあの吸血鬼が口先で上手く丸め込んだのだろうか？
何はともあれ、この男は俺の従僕であり俺がマスターであることはようやく、重々承知できた。
「その……一応真名を聞いていいか」
真名。座の招かれた英霊は基本的、クラス名として呼ばれるのが常らしい。
バーサーカーとして召喚したのだから、それを呼び名として使うべきなのが慣用だとか。
この場合その流儀に従うのが普通だろうが、
バーサーカーの名で呼ぶ事に違和感を与えていたのは、狂戦士がここまで流暢に会話できるのだろうか？との尤もらしい疑問だった。
だが聞いても返ってこないと結局、聖杯の奇跡の些事だと流した。

一応、さらなる忠誠心を図りたい雁夜は、まさかとは思うが核地雷を踏み抜く覚悟で問いただす。
真名を晒すのは自らの首を下げながら戦場赴くようなものだと、聖杯戦争について知識は乏しい雁夜でも理解はしていた。
要は関係にしこりを残したまま、戦いに望むのはあまりにもリスキーすぎる。
どれだけ関係性がこの生存確率に作用するかは、雁夜の範疇外であった。
ただ運否天賦が絡まるのなら、手に滑り止めを掛ける程度の下準備は必要であろう。
会話が出来るなら尚更だった。
「……デイモス」
しばらく沈痛の面で固まっていた、刺青男は間を置いて名を口にした。
やっと人間らしい会話をサーヴァントと交えられたことに、安心の色見せながらも続いて雁夜も自己紹介する。
「デイモス……？まぁいいや。俺の名は間桐雁夜。一応アンタのマスターになった者だ」
「えーと…色々あって絶対にこの戦いには負けられないんだ。だから…よ、よろしく頼む」
だが癇癪をまた再発するのではないか、という疑念の恐怖を噛み殺し、再び儀礼の手

を出した。
「あっこれは、この世界での挨拶で……つまり仲良くしたいって意味だ」
慌てて握手についての常識を述べる雁夜に、クレイトス（デイモス）は言葉を返す。
「知っている、というより今知った。何処からか知識が流れ込んだらしい。これもサーヴァント種の能力か」
雁夜も臓硯から予め聞かされていた雑学紛いを思い出す。
聖杯に招かれた英霊は世界の基礎知識を配布してくれるだとか。なんとも利便性に富んだ物なのだろう、聖杯とは。
ささやかな敬意を聖杯に表明していると、クレイトスは中に浮く雁夜のやせ細った手を握った。
分厚く鎧の如くの重厚な感触だった。
滾る血潮が病弱な雁夜に、生命の灯火を分け与えたように錯覚するほど。
「長く……ないのか？命は」
クレイトスの尖った真実の鏃が胸を刺した。
瞬時に素性を暴かれた事による、恥に近い感情とクレイトスから放出される同情とは言いがたい、何か悲壮を纏った意識で硬直する。
「あぁ……そうだ。俺は近い内に死ぬ。だから絶対この戦いで勝たないといけない。だ

からデイモス……いやバーサーカー」

死に直面した時、人は何かを残そうとする生物である。それが子であれ物であれ創作物であれ遺産あれ。

クレイトスはその何かが”勝利”だと決意の眦(め)から読み取った。

「バーサーカーでかまわん」

「そして、雁夜。お前に同情する気もさらさらない。勝利のためなら容赦なくお前を使い潰す」

同じくクレイトスも雁夜の真意の沿い言葉を紡いだ。

「あぁ……それで構わない。こっちの気なんて留めずな。文字通り狂戦士らしくやってくればいい」

「お前も負けられない理由があるんだろう?」

クレイトスは動機については語らなかったが、顔の刺青を掌でなぞりながら首肯した。

「頼むぞ、バーサーカー(クレイトス)」

「言われるまでも無い、雁夜(マスター)」

この聖杯を巡った殺し合い、第四次聖杯戦争にて一つの陣営がここに誕生した。

死人紛う男と

「では行くとするか」
「は？今からか？」
「当たり前だろう、お前の短命を念頭に置いて行動する。いつ死ぬか分からんのだからな」
「いや色々偵察の準備だとか、だな……」
「不要だ、お前も都合を無視しろと言っただろうが」
「それとこれは……！話が別だろうが！」
「知らん」
「おい！バーサーカー！」
「置いていくぞ、マスター」
狂戦士陣営が忙しく外に繰り出して行ったのを確認すると
間桐邸、屋根伝いで間桐臓硯は監視の名目である、盗み聞きの成果を人知れず隠れ笑いをした。
「なかなか拾い物を掘り当てたな、雁夜めが。さてこれからどう混ぜ返してくれるやら」
臓硯は悲願である奇跡の成就は脇に置いて、二人の男がどう戦争をかき乱すのか胸を弾ませる。
そして、斜陽を眺望しながら破顔した。

――アテナよ。貴様の詭弁の救済など要らぬ。私は自らの手で掴み取ってみせる。
この異邦の地で

『邂逅』

強襲

外の理から魔人達を召喚せしめた、魔の初夜から4日目。
冬木市の朝は何の変哲もなくまた訪れた。
諸人は起床し、各職務を全うするための事前用意を開始する。
そして人工無機物であるこの棟梁も例外ではなかった。
朝焼けが水面を染めて、深緋に染まった未遠川を跨ぎ、鎮座するのはビル郡が林立する新都と住宅街が立ち並ぶ深山町を繋ぐ冬木大橋。
そんな大橋の最初の任務である拠点役を勝手まま命じた、カモメ達は弧を描くワイヤーアーチと主塔を占拠し餌狩りの機会をじっと伺っていた。
これを終えたら、次は自らを建造した人間達の橋渡しとなる。今日もまた経済を循環させるために車両の通行が激しくなるだろう。
そんな、また慌しい冬木の儀礼的日常が始まったのである。
七人のサーヴァントと魔術師たちを除いて。

遠坂葵と遠坂凛の妻子は聖杯戦争の勃発を要因に、時臣から安全観点のリスクから逐電を命じられていた。

場所は葵の生まれ育った実家の禅城家である。

そんな慣れしたんだ久方振りの我が家で、葵は主婦の日課である朝食の下ごしらえに取り掛かっていた。

嫁ぎ先と違って潤沢な素材はなかったが近くのスーパーマーケットで用は足りた。

献立は日本の食卓で基本的な物品を軸にした。白米、味噌汁、納豆、鰺の開き、カボチャの煮つけ、金平ごぼう、ひじき、漬物。

冷蔵庫を覗くと、パックキムチとりんごの切った残りが入っている。

ついでの冷蔵庫の掃除もしてしまおう。

と朝餉の献立を追加した葵は、さっそく味噌汁作りから着手した。

良家の娘とは言え、食事については質素な食事の方が好ましいと感じていた。

「欲しがりません、勝つまでは」

とまでは行かないが戦時中の標語に倣うが如くだった。

今もなお生き馬の目を抜く、悪辣な命の駆け引きをする夫を、尻目に宮廷料理を箸で摘めるわけもない。

自主的な謹慎さを無意識ながら、本籍から転移しても遵守するのは葵の聖杯戦争への意気込みとも言えた。

葵は包丁で豆腐に切れ目を入れつつ、逐電を命じた主の奮戦する姿を脳裏に浮かべる。

愛弟子の言峰さんは心配ありませんと、憂虞する私を斟酌してくれたけど……。

どうも気が気でない。そしてもう一つの心配事。

間桐家に接受された桜と家出人、間桐雁夜。

風の噂では聖杯戦争のマスターとして参加などという、根も葉もない噂が耳に入っていた。

時臣と綺礼との横繋がりから、水漏れのように沸いてきた風説であった。

魔道から出奔した彼が何故帰ってきたのだろう。

桜を救うため……？そのために魔術師としてあの人を討ち果たすのだろうか。

あくまで最悪の推定に過ぎないが、想像しただけでぞっと、悪寒が体内を蹂躙し、頭蓋の神庭を痛点として刺激した。

魔術師として聖杯の争奪戦に参加するということは、夫を加害対象して看做す遠坂家

の宿敵として見ろと同義。
無論、魔術師の妻としての心得と自覚は葵とて不勉強な訳ではない。
だが幼少時から友誼を育くんできた”大切な友人”に対していきなり敵意を向けろと、時臣の勅令でも無理だと突っぱねるだろう。
それは葵の和を取り持つ人格性の美しき長所であり、またそれを理解できぬ者には大いなる勘違いを引き起こした食虫花の短所。
その長短の意識に苛まれつつ、包丁の柄を震えながら握り豆腐をさらに刻んでいくが、これ以上切れなかった。
葵は沈思あまり豆腐を細切れのペースト状にしたことにようやく気づいた。
忘我の熟思に顔を紅潮させながら新たな豆腐を調達した。
「どんな時でも余裕を持って優雅たれ」
遠坂家で代々伝播されて来た金言。時臣も度々謙虚な信者が祈りの誓言を捧げるように、口ずさんでいた。
葵はその言葉を心中に穴に深く、充填し時臣の妻としての有り方を再認するのであった。
ふと…またその穴に皹を走らせる、思考が開く。
桜……ちゃんとご飯食べてるかしら。と間桐家に滞留する愛娘の食生活を案じなが

ら、お玉杓子から鍋に味噌を溶かし込んだ。

クレイトスのマスター、間桐雁夜は懊悩していた。
悩みの種は予想するまでもなく、クレイトス本人の問題である。
自前の雑な聖杯戦争知識に依ると、魔力供給無しに自立行動を可能とする、三騎士クラスの弓兵のみに備わる固有スキル「単独行動」がある。
クレイトスは度々雁夜のパスから切断し、単独で冬木市を闊歩する放浪癖があった。
正確には現世での散策などを楽しむ趣味などはないだろうから、確実に獲物を捜索するための行方不明である。
繰り返し言うが、彼はバーサーカーである。固有スキルに単独行動は付加されていない。
それなのに何故ここまで長時間魔力供給を断って、転転できるのか実に不可思議だった。

バーサーカーはまさか俺の余命の尽きに懸念しているのか？だから出来るだけ早くサーヴァントを狩り出そうと必死に……。

召喚日の問答で、千里眼の如く解明されたが、こんなことだったら無理でも惚けておくべきだった。

別の意味で寿命が縮まる……。雁夜は溜息と共に疲弊を吐き出した。

「マスター、見つけたぞ」

本皮のソファーで悩める銅像となっていた雁夜は、唐突に殺気を孕んだ声を掛けられたことによって元の状態に復帰した。

「脅かすなよ！バーサーカー」

心臓をどぎまぎさせながら、帰還した従僕の報告を受ける。

「で、何を発見したって？サーヴァントか？」

「あぁ、四体のサーヴァントと思しき連中が海岸線近くに集まってる。私たちも参じるべきだろう」

凛然と大軍との戦闘を望み、単機で殲滅しつくさんとする、クレイトスに雁夜は汗を玉にして遮った。

「四体……?!そんな団体で集結した奴らを相手にしてどうする気だ！」

「もちろん全体殺す、当然だ」

クレイトスの返答は論点が翼が生え、増設されたジェットエンジンが点火し、大気圏を超突破し宇宙の彼方へ飛翔していた。
雁夜は本人には心当たりがまったくない暴力的反論を、なるべく過去の事例に則って、逆鱗に触れないように慎重に諭す。
「だからお前一人で勝てる勝算でもあるのかってことだ」
「無論。私、一人では不服か？」
森羅万象の確定事項を述べるが如く、クレイトスは断言した。
雁夜も歴戦のスパルタ戦士から発せられる、何よりも雄弁な鼻を麻痺させる今まで浴びてきた血しぶきの臭いに圧倒されかけていたが、とりあえず計画だけでも聴取してみることにした。
「で、どうやって？」
「だから全員殺す」
秒針が半周した。
つまり……クレイトスの弁によると、戦闘計画的な緻密で面倒な図は側溝に投げ捨て、霊力迸る虎の巣に突撃し四体のサーヴァントを殺戮するのが本人の意する真である。
まさしく太古に怪物と兵士の死体運河を幾万開設した、戦争の神のみしか思案できな

い作戦計画であった。
だが雁夜はもちろんそれを知る由もない。
痺れを切らしたクレイトスは獲物のブレイズ・オブ・カオスを背から除装し点検し始め、雁夜に折れぬ気配をさらに強めた。
「これ以上、議論を交えても時間の無駄だ、スパルタは水と時間を金穀と同価値として扱う」
「尻込みするなら、この屋敷に蟄居していればいい。はっきり言ってマスター…貴様は重石だ」
唐突に従僕より宣言された戦力外通告。
バーサーカー陣営のＣＥＯ、狂戦氏は暫定マスター間桐雁夜選手に、身体的不健康を理由に陣営から退団するよう表明を強めたが
雁夜選手はそれを不服として、意向を拒否。
「俺はまだ戦える。お荷物だという認識はまったく当たらない」
とＣＥＯに猛反発しこの通告は次の契約更改まで縺れる模様…。
って違う。雁夜は心中でスポーツ新聞風の文面を叩き割った。
「いいか、お前がこの冬木で現界していられるのはな、俺が魔力パスとして供給してるからだ！それなのにお前は勝手にパスを…？」

――――いや待てよ。先ほど浮かんで消失した疑問が雁夜の心を噛んだ。
そもそも何故バーサーカーは固有スキル無しに、パスを切断して冬木市内を散策する武力偵察をできたのだろうか？
バーサーカーは半日以上も間を置いて燃料補給する事無しに、市内を歩き尽くしていた。
だが当然その間、ガソリン無しに一人でに車は移動できたということになる。
まさか食事？サーヴァントも食物の形でカロリーを摂取すれば、魔力供給できたことになるのだろうか…。
そもそも肝心の路銀すら渡していなかったし、万が一の何か問題を起こした時用に、地方新聞やニュースなどのバーサーカーの目撃情報にはなるべく目を通した。
だが「白色巨漢刺青男。白昼堂々食い逃げか」などというセンセーショナルなニュースはいくら漁っても発見できなかった。
と、なると何らかの形で、魔力供給を行っていることにはなるだろう。
雁夜はその何かを推理するために、じっと不機嫌そうなバーサーカーを観察してみる。
弄んでいるのは、貴金属で鍛造されたと予想するの鎖鎌の武装だった。
そう言えば召喚当初からこれを肌身離さず身に付けていた。

これがバーサーカーの宝具なのか？まぁ金色の右篭手の線も無くは無いが…。
とにかくファクターを手に入れた雁夜はそれを問いただした。
「なぁ、バーサーカー…それ」
丁度、検め終わった鎖鎌剣を元の背刀室に戻そうとする、それを指摘する。
「これか？これは私の契約である対価だ。そして今までこれで全て戦い抜いてきた」
と再び抜き、象嵌された刃面を鬱々しげに覗き、何かを懐古しているようである。
成る程。雁夜はわざわざ供給源を問うことなく真相のパズルを完成させた。
これが魔力の貯蔵タンク役を果たしていた訳か。
バーサーカーは過去の戦歴で確実に人外ではない相手も切り伏せてきてるのは薄々察してたいたが、その血を何千年も吸い込んで来た愛刀が魔力を宿したと考えるとすっと筋が通る。
それがこの四日間の半日近くパスを切断し、あたかも単独行動のように振舞っていた正体だった。
流石に無尽ではないと思うが、刀に膨大な残滓魔力と雁夜の供給を合算すると、永久機関の如く動けることになる。
これはますます手に余ることになるな、と解決した後も未来の疲労が尾引いたのを感じたのか、ささやかな頭痛を感じた。

　そしてついに雁夜は竜虎合い乱れる、戦場の地へ踏み入れる決心を固めた。
「分かった、バーサーカー。お前の言う通りに従う。ただしこれだけは守れ。四体を一気に相手するな。分断して戦うか、単独を狙撃しろ」
　やっと雁夜が言い分を食んだ事に安堵したのか、クレイトスは主人の言いつけ混ぜ返しながら、こう皮肉った。
「構わんが、お前が来ないと私は完全に約定を守り抜けるか分からんぞ。戦場は絶えず変化する自然だ」
「机上の石駒でしか戦えない愚鈍な軍師は、その事に気づけず煮え湯を飲まされてきた。私の代でもな」
　雁夜はそれを受け、顔を崩しながらまた返す。
「重石はいらないんじゃなかったか?-それとも俺は首輪役の重石か?-」
「貴様は邪魔だが、安全な場所で脚を崩して棒を振る軍師も癇に障る。共闘するなら共に首を晒しあい守りあうのが戦の倣いだ」
「水と時間は金穀だったっけか?-兵隊の”水”は輜重として重要だもんな。精々頑張って守ってくれよ。狂戦士」
　クレイトスもまた顔つきは不動ではあったが、雁夜流の檄はスパルタの魂に可燃物質を運び爆ぜさせた。

正直、雁夜もバーサーカーの言による、お荷物発言は正論だと思った。
だったら家に閉じこもっていれば戦力低下を阻止できると、普通の人間はそう考えるだろう。
だが仮にクレイトスが拒んでも付いていきたい理由が二つあった。
まず、一つ目。
クレイトスが愛刀、鎖鎌剣がクレイトスのパス供給が足りぬ分を、補うドロップタンクとして機能しているのは先程辿りついた事実だが。
雁夜が危惧しているのは、戦闘時における魔力欠乏である。
己が既知しているのはあくまで現界を維持するだけは充足しているというだけで、サーヴァント同士の戦闘における残余量については当然把握していない。
そもそもどれだけの貯蔵量があるのかすら、克明と理解できていない。
土壇場で魔力欠乏で、死亡などという間抜けな死に方は狂戦士ですら御免こうむるとだろう。
そして、二つ目。
それは見極めであり能力の試金石。
俺はコイツの力をまだ見ていない。
これほどまでに多数のサーヴァントより覇の独占を強調するのは己が最強たる自負

だろう。
と雁夜は勝手まま思案の海に沈む。
――――汝、自らを以って最強を証明せよ。
この現の通り、見定めさせて貰おうじゃないか。お前の実力って奴を。

強襲・ｐｔ２

雁夜は戦闘準備はあっけなくすぐ整った。
予め用意しておいた、ショルダーバッグを肩に掛けるだけで済んだ。
バッグの中身は全て刻印虫に犯される疝痛を耐え抜くための道具である。
「いいぞ、バーサーカー。で場所は何処だ?」
手を翳しサーヴァントを絶対的に服従させる刻印。
全世の理すら欺く異能を解放すべく、クレイトスに問うた。
「海だ」
あまりにも抽出的すぎる返答に雁夜は呆れ顔を示した。
「馬鹿!範囲が広すぎるだろ!もっとなんか特徴的な建物とか…」
「石だ。確か海隣に鋼の石が積まれていた」
石…?雁夜はクレイトスの意地悪問題を解きほぐすべく、脳から冬木の地理情報を総動員していた。
そもそも聖杯から現代知識が付与されているのではなかったか?という根本的な矛盾は無視する。

海…石…？石で出来たモニュメントなんか存在しただろうか？
海岸線で石と言えばテトラポッド…。駄目だ、鋼のワードが関係しない。
今確定しているのは海付近という情報だ。これを元に思考すれば解決できるはず。
ふと、海のワードから次々と連想して行くと…偶然ながら一つの推理が組みあがった。
それを証明すべく、クレイトスに最後の手がかりを提示する。
「なぁバーサーカー、もしかしてデカい建物が無かったか？えーと塔みたいのだ」
「塔…？あぁそういえばあったな、赤き色の建築物だった」
ビンゴ。バーサーカーが言いたいのはクレーンだろう。
つまり情報を統合すると、海付近、鋼の石、クレーン。これから導き出されるのは…。
――――答えは埠頭だ。
鋼の石は輸送用コンテナのことだろう。
手間取らせやがって…。
戦闘前の無駄な推理でほとほと生気を抜かれた、雁夜は今度こそ令呪による瞬間転送をすべく命令文を口ずさむ…。
が、クレイトスが雁夜の手を掴み、止めた。
「何だよ…」

雁夜が後退りしながら尋ねる。
「無駄だ、こっちの方が早い」
そう切り返すと、雁夜の前襟を鷲掴みし、武術の投げの如くの体勢で雁夜を背負った。
次に取った行動はまた雁夜の心臓を急停止させかけた。
壁が鉄球で破砕されるような衝突音で耳がダウン。
高温モスキート音のみを認識し、顔面に当たる突風を感じた瞬間。
雁夜はようやくクレイトスが屋敷の壁を物理的に突き抜けたことに気が付く。
「うわあああああああああああああああああ」
雁夜の悲鳴は、配達人クレイトスと共に下階の樹海庭園を飛び越え、名前すら知らぬ、隣家の一軒家の屋根に軽やかに着地する。
今度はクレイトスが雄牛の絶叫より夜の静謐を粉砕する大気震う、掛け声を上げながら、上腕筋を膨張させ、クレイトスは闇空に雁夜を投擲した。
「るあああああああああああああああああぁあああああっッッ!!!」
雁夜は叫ぶまでも無く、顔面を青白くし砲弾となった自分の状況に、脱魂させた。
自らが飛翔しながら、高速で流れる星空を眺めるプラネタリウムはさぞ美しいだろう。
だが徐々に重力に従って、落下していく雁夜は夜を照らす不夜街、新都の眩い光に吸

い込まれそうになっていた。

「バーサーカーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

空に弧を描き、飛行する雁夜は全精力を注ぎ込んで、従僕の救助を請う。

もう後一分もせず内に、空から落下する弾丸Ａは地面に着弾し、肉塊Ａへとクラス変更しそうになっていた。

その頃クレイトスは、住宅街を飢えた狼が餌を狩るように背を低め、水切り石のように屋根から屋根へ跳躍を繰り返し、投擲した弾丸を捕球すべく奔る。

傍目から見たら黒き陰が風神を纏い、何かの人外の標的を追っているようにしか見えないだろう。

しかもその後、目撃した一般人から言伝で伝播し、伝説のスパルタ人は宇宙から飛来した黒煙生物のＵＭＡとして冬木市の都市伝説で語り告がれるのはまた別の話であった。

ついに雁夜は新都のコンクリート道路を埋め尽くす車両の渋滞へ接触しようとしていた。

的は不幸にも新車に乗り換えたばかりの、サラリーマン男性が乗車する車。

男は偶然にも近くで爆発事故を理由にした、深夜の不自然な渋滞に嵌り、原因に首を傾げていた。

だが新しく手に入れた愛車の乗り心地を十分に堪能し、ニューマシンのハンドルを握る興奮で懐疑心などどこに吹く風ではあったが。

そんな幸運を高速で破壊すべく招来される、弾丸Ａはボンネットとフロントガラスを着地点を見定める。

後、１０秒。

２秒。

――１秒。

雁夜の白髪先端が車体の塗膜に接触した瞬間。

フロントガラスに頭蓋が擦過させながら、黒い影がガラスを一瞬横断する。

たまたま、運転手それを目視したが、意識の範疇外だったのでラジオに再び耳を傾けた。

こうして無事、新車に死体を塗装せず済んだのだった。

弾丸Ａが新車を粉砕するかも知れなかった、幾秒前。
クレイトスは落ち行く雁夜を目で確認すると、超高層ビルの上階、窓辺に鞭先の剣をハーケン代わりに撃ち込み固定。
鎖をロープとして、上から下へ足を振り出し、時計の振り子の如く遊泳する。
そして激突すれすれの雁夜の脚を悠々とキャッチした。
またロープ化とした愛刀を、鞭を振るう勢いに匹敵するほど加速させ、空の踏み切り台を蹴ると、無事ビル屋上へと帰還した。
当のお荷物雁夜は、ほど凡人が人生で体験し得ないであろう修羅場を経験しすぎたのか、青息吐息の顔になっていた。
「おい、お前…ふ、ふざけるなよ…」
と必死に怒りを露わにするが、過呼吸で殺虫剤で噴射された虫がもがいてるようにしか見えない。
「マスター、聞くのを忘れていた。場所は何処だ？」

再び雁夜はこの恐怖で発狂を免れぬアトラクションを十分と味わうことになった。
そしてビル渡りで、恐怖心など当に麻痺した頃、ついに戦場である埠頭を眺望できる工場屋上に登攀した。
埠頭中心部では既に二体のサーヴァントと思しき連中が破裂音を存分に轟かせながら、剣戟の火蓋を切っている。
剣と槍が衝突するたびに、気絶しそうなほどの光量が焚かれ、目が潰れそうになる。
「あいつらか…俺たちの相手は…」
ただでさえ低い視力と聴力がさらに機能低下しそうだったので、用意しておいたショルダーバッグから耳栓を取り出し、装着する。
だがまったく耳栓はこの爆音に対して効力を発揮してくれず、諦め戻した。
そして、なるべく戦闘地域を見ないように、クレイトスに制約を確認する。
「さっき言った事は覚えてるよな?バーサーカー」
戦闘を見下ろすスパルタの戦士は既に、かつての戦闘本能と戦場で研磨された殺意を雁夜の肌を刺すほど放射していた。
召喚時初めて接見したクレイトスとまったく同じ姿である。
「一体のみを率先して狙え、か?」
雁夜の問いかけに、鬼神を彷彿とされる血走った目で雁夜を見据えた。

「あぁそうだ、ちゃんと守れよ」
「……努力はする」
理解しているのか、いきなり約定をはぐらかされた気持ちになる雁夜は歯噛みしながら、悶々としていた。
だがその憂鬱は、突如直接振って沸いた富岳を崩壊させる雷鳴がでかき消された。
目を向けると、先程の戦闘は中断されているではないか。
なにやら古式の戦車に搭乗する覇王を喧伝する赤き外套を羽織った、巨躯のサーヴァントはいつの間にか、二体のサーヴァントの中心に割って入っている。
そして野太い猿叫を迸らせ、演説の口振りでこの地で宣告した。
「我が名はイスカンダル！ライダーの座として聖杯にこの地に繋ぎとめられたゼウスの子よ！」
「さぁ我が軍門に下り、聖杯を褒章とし共に分かち合う気はないか！歴戦の勇者！千人斬りの猛者！強欲たる王！サーヴァント達よ！」
雁夜も真名を突如明かしたかと思えば、敵を勧誘する剛毅と馬鹿の紙一重に呆れの無言を通しながら、ふとクレイトスの横顔を見る。
居ない。

先程まで隣で修羅の戦闘態勢に入っていた、クレイトスは忽然と消失していた。

「おい！バーサーカー！」

雁夜は近郊を一周見たあと、サーヴァントにより戦場化した中心地に望み、凝視する。

クレイトスは地に降り立っており、精神は殺戮の鐘を鳴らし、闘争を開始していた。

既に心底から焦がす憎悪の炎獄が、クレイトスの理性をとっくに焼き払っているのを今、雁夜は知るのだった。

強襲．ｐｔ３

自体の急展開に驚いたのは人物マスター、サーヴァントを含め、遠方のコンテナ山で光学機器を駆使し、状況を見守っていた衛宮切嗣もその一人だった。
切嗣は手早く舞弥の注意の無線を入れる。
「舞弥、新手の敵だ。用心しろ。近くにマスターは確認できるか？」
「了解。捜索します」
と魔術師殺しお得意のヒットアンドアウェイ戦法の要石である、偵察を指示すると再びスコープを覗いた。
イスカンダルは一頻り降伏と寡兵の演説を述べ終えると、ふと自分に近づく刺青の鬼兵に気が付いた。
「何奴…？貴様サーヴァントか！成る程、お前も余の軍門に下り覇を分かち合いたいと申すか？」
征服王は突然来訪したスパルタ人を手厚く持て成し、戦車より下車し頭から足元まで舐めるように、王の真贋はマケドニア軍の兵隊としての素質を審査する。
そして美術品を眺め終わったような、感嘆の溜息を漏らすと、また饒舌に油を刺して、

無思慮な勧誘を加速させた。
「何たる鍛え抜かれた肉体！その鷲を彷彿とさせる射殺す眼光！貴様…何者だ！我が軍も最上級の精鋭兵が揃っていたが…」
「その神話時代の神々を模した石膏から蘇り、生を受けたような荘厳な雰囲気は！ゼウス神殿でもそこまでの神像は見た事がない！」
「ぬおおおおおおお！欲しい！貴様が欲しい！さしては並の英霊ではないな？まぁ当然肉体的に見たら余には負けるが！」
「とにかく欲しい！！！」
とクレイトスの兵隊としての有り余る素質を褒めちぎる。
まるで女神に射抜かれた小男の寓話のように口説き、兵団への勧誘を止めない。
「貴様が我が軍門に下れば、百万騎の兵と交換してしても構わん！御旗を掲げ朋輩として手を取り合おうぞ！刺青の戦士よ！」
「さぁ！我がマケドニア王国のイスカンダル三世の元でゼウス神の庭を駆け巡ろうではないか！」
興奮を抑える口ぶりも無く、雌に雄が示す、求愛の絶叫し終え、ライダーはクレイトスに忠義の手を伸ばす。
先程まで寡兵の対象だった、剣兵、槍兵は唖然とその様子を傍観する。

だが、まったくクレイトスの発する殺意と憎悪を混合した思念に、ライダーはまったく気づこうともしない。

戦場で幾つモノ死線を乗り越えてきた、征服王にとってそう珍しいことではなく、この不感症はある意味職業病に近かった。

隣でそのまた別の巨躯男の殺意を、受信したウェイバー・ベルベットはヒッとライダーの背に逃亡した。

「馬鹿！ライダー！何暢気に勧誘なんてしてんだ！そそそそ、そいつ僕たちを殺そうとしてる！」

神聖な寡兵の場に水を差された征服王はウェイバーに音速凸ピンを叩き込み、一喝した。

「阿呆なのは貴様だ！当たり前であろう！殺し殺されの首のやり取り場で殺意を消す兵など居らんわ！」

「……ウスの子か？」

震える活火山、クレイトスが怒りを最小限押さえ込む奇跡を成し遂げながらライダーに問いを投げる。

だが生憎、爆発寸前の歯鳴りが声をかき消しライダーには肝心が伝わらない。

「うん？何か申したか？もう一度申してくれぬか？」

「貴様はゼ――――」

そういい掛けた瞬間、黄金玉が爆ぜたと錯覚するほど眩い金色が、埠頭を照らした。

金貨を鋳潰した如くの粒子が四散する。

そこに顕現するの絶対無二、万民が平伏する天に祝福された王。

尊大な侮蔑を撒き散らす視線は、サーヴァント達を捉えた。

「この我(オレ)が所有する庭をゼウスなどという紛い物の創作の庭だと…？ 馘首、火刑、水刑、好きなのを選ばせてやる雑種」

そう天下の法を司どった口ぶりは、地上を等しく己の所有物と見定めるまさしく慢心の神。

「今宵はまったく不愉快な夜だ、王だの庭だの、この我(オレ)を差し置いて…」

死刑宣告の条文は今もなお止む気配は見せず、傲岸を極め足る王は下界の愚民に槍を差し向ける。

王の財宝(ゲートオブバビロン)。王の宝物を守護する要塞にして、砲台。

黄金に食われた空間から古今東西の兵装が、剣先を罪人に向いて出現する。

王により開廷された神も拒絶する司法場は、王の処刑命令を待機し待ち望んでいた。

しかしクレイトスはそれを平然と崩壊させた。

背から抜かれた、ブレイズオブカオスは蛇が乗り移ったように、うねると街灯を玉座

とするアーチャーの脚部を瞬に捕縛した。
つまりアーチャーを鉄とした鉄球が完成。
それを闇空に全力で振り上げると、クレイトスは地上に屈辱の刻印を押した。
「るあああああああああああああああああ!!!!!」
狂戦士の憎悪の咆哮は、埠頭を震撼させる。
砕破したコンクリート地面から鎖を手繰り寄せると、次は横薙ぎに振り回しコンテナが積み重なった集積地に激突させた。
保管されていた貨物が地に散乱の雨を降らし、コンクリート片とコンテナの屑片飛び回り、土煙と黒煙が視界を奪う。
次の瞬間、金色の灯火が黒煙の支配を殺し、大小の郡体の金色の砲門が展開されると、そこから何百個の槍剣が狂ったように乱射された。
時折天空に暴発した宝具が闇を裂いて一筋の金色描く。
既に埠頭は酩酊者が操縦する高射砲の発射基地に変貌しており、隣接する区画すら宝具の爆撃嵐が襲撃し、衝撃波が構造物を粉砕し常に黒煙が大気を汚し舞う。
高く積みあがったコンテナ台から偵察していた衛宮切嗣は、この期を攻撃の絶好のチャンスだと捉えていた。
無線から悲鳴に近い声で呼ぶ舞弥の声は無視する。

四方八方から飛来する宝具がこの場所に命中しないことを祈りつつ、スコープを覗き込んだ。

スコープ内を奔る奔る、宝具の軌跡に流石の魔術師殺しも戦々恐々する。

命を賭したマスター狩りの哀れ対象になるのは誰か。

スコープを懸命に動かすが、どこを見渡すも、瓦礫の小山と、猛る宝具のみで、破壊されつくした更地しかなかった。

すると一人の人間らしき黒い形が蠢き、頭隠して尻隠さずになっているのを見つけた。

それはランサーのマスターであるケイネス・エルメロイ・アーチボルトだった。

この発狂した第一乱射に巻き込まれために、既に四肢を吹き飛ばす、戦闘不能状態であった。

ことの経緯は、瓦礫の雨から守るため、月霊髄液（ヴォールメンハイドグラム）をドーム状の避難壕にしたまではよかったが、アーチャーの宝物の一つが不幸にもドーム付近で暴発した。

あくまで月霊髄液（ヴォールメンハイドグラム）は対魔術師戦闘用に特化した礼装であり、サーヴァントからしたら紙で模した盾より脆弱だった。

結果として、ケイネスの下肢を丸ごと潰し、ケイネスは両足とその他の半身部位、内臓を諸々を破裂させ、五感のうち、聴覚、視覚、嗅覚、味覚の四感を削がれた。

唯一、手のみだが触覚が残存したのは、ダンゴ虫が包まるように令呪が備わる手を防護したためであろう。

令呪のみがケイネスの最後の生身となった。

それを知らぬ切嗣は、焼け残った外套からケイネスだと認識。

スコープのレティクルを頭部に合わせ、ワルサーの引き金を絞る…。

瞬間、体の奇妙な感覚に陥っていた。ジェットコースターがレールの頂点から丁度居り始めたような…。

――不味い！

鉄骨が食い破られる、破断音を聞くと鳥肌が皮膚をひた走って、精神の雷管を叩き、一気に精神を取り戻すが、時は遅し。

槍状の宝具が建造物の支柱をまるで豆腐を裂くが如く、当然というように一気に倒壊し始めた。

切嗣は魔術回路を駆動させ、体内時間を強制操作する、固有時制御（タイムアルター）を発動し、鉄片と共に落下していく体を、全力で海側に退避させた後、コンテナと同じく海中に叩きこまれた。

狂戦士によって引き起こされた、宝具の大花火の余波は他マスターすら飲みこみ、黄金の死を未だに撒き散らしていた。

「貴様アアアアアアアアアアアアアアアアア!!この王たる我(オレ)をこの汚れた大地に叩きつけるなどという大罪!首を落とそうが許さんぞ!下賤な雑種め!」

不幸を表す赤き月の瞳はさらに憎悪の輝きを増し、クレイトスに身を削ぎ落とす憎悪を吐き出した。

だが当のクレイトスはアーチャーを引き釣りながら、その呪詛に返礼するかのように、再び宙にアーチャーを振り出し、叩き付けの作業を再開した。

一回。二回、三回、四回、五回。六回。七回。八回。

畑の土を耕すように、鋤を叩き込んでは、煙と破片を排出する。

所詮人間界の技術で建築された、コンクリートの土台はついに降伏の根を上げ、海水の浸水を許し始めていた。

だがクレイトスは叩きつける土台が無くなれば、今度はコンテナ集積に先程の再演を繰り返す。

英雄王の猛り狂いを代弁する、王の財宝(ゲートオブバビロン)は分散しながら、鉄球を振るうクレイトスに乱打を繰り返すが、被害を及ぼすのは埠頭と他マスターだけ。

更地と瓦礫の山を駆け回りながら転戦し、爆風の列が近づいてきたら、その鉄球ごと跳躍し、また沈没していない土台に打ちつけ続けるのだった。

遠坂時臣は、綺礼の送る実況放送に優雅さの欠片もない、慄きと恐怖に見舞われてい

た。
王の財宝（ゲートオブバビロン）は、乱射魔が機関銃を四方に弾丸を飛ばすように、晒すほど宝具の特性を知られ切った。
そして、英雄王を蹂躙する賊は今もなお、アーチャーのプライドに汚水を塗りつけている。
これを令呪で呼び止めたら、その怒りの矛先は確実に自分へ向く。下手を打ったら、己が殺害の対象になるのだ。
そう安易の戻れとは呼び込めなかった。
紅の双眸を滚らせ、憎悪に固まった顔のアーチャー。黄金の門から放たれた宝具が自分を刺し貫き、遠坂時臣は剣山となる…。
これほどぞっとした事はなかった。
フローチャートの考えを巡らせただけで、髪が冷汗で湿り、内臓がストレスで噛むように痛みだす。
「我が師よ、応答願います。緊切の連絡です」
愛弟子の言峰の声は一見、冷静を保っていたように聞こえたが、明らかに動揺と焦燥を含んだ呼び声だった。
「何だ、綺礼…」

これ以上何があるのか、薮蛇を突く思いで報告を聴取する。
「このまま状況が推移すればアーチャーが乖離剣を使用する可能性があります、至急令呪による撤退の宣告を」
「エア…だと…」
乖離剣エア。英雄王、最大の宝具にして。最強の剣。
ひとたび振れば、天地開闢の再現と謳われる、何人を殲滅し消滅奉る生滅の剣…。
糸が切れたように時臣は頭を抱えこんだ。
「こんな序盤戦でエアを解放するとは…あり得ぬ！あり得ぬ！あり得ぬ！確実に！」
そう心中で連呼するが、一向に事態は改善しない。
時臣もそれを重々理解できてたが、どんな優秀有能な人間でも一度折れるとそうそう支柱は修復は出来ない。
あまりにも聖杯戦争の恐ろしさを味わい尽くした、時臣はがっくりと項垂れるとまた逃避の世界に入り込んだ。

強襲．ｐｔ４

「アイリスフィール！アイリスフィール！」

衛宮切嗣が召喚せしめた英霊、セイバーは潮と煙が香り、常に爆炎轟く、戦場で顔を青くしてアイリスフィール・フォン・アインツベルンの身柄を捜索していた。

先刻まで剣戟を刻んでいた、ランサーとは事態が事態なので一旦休戦を結び、互いのマスターの安全確保の任にあっていた。

我がマスターである、切嗣の行方もしれなかったが、それは元々だ。

それにしても…。

あまりにも自分の戦争感から懸け離れた、クレイトスとギルガメッシュの戦いには驚倒しそうになった。

騎士と騎士が名誉を秤に武勇に交わし、その果てに手に入れる褒賞こそ聖杯だと認識していたからだ。

ブリテンの王として、母なる祖国の地を征服せんとする、異民族相手に何度も剣を執り殺しあう血の惨劇をセイバーも知らない訳ではない。

自らが直々に剣で刎頸した首の顔すら思い出せるほどに。
だがそれは無辜の民を喜々として、虐殺し、金品を強奪して、女子供を犯す屑の郎党の話だ。
この聖杯戦争は神託を受け、清き正しき英霊達が馳せ参じ、天命なる天啓を帯びた舞闘会。
あんな虫を解体していく如くの酷薄で残忍な苛虐性が暴力的に展開する決闘を繰り広げる英霊まで聖杯に選抜されていたとは…。
切嗣と言えばあの仄暗い眼窩から滲み出る、〝何か〟はあの刺青の巨漢も同じだった。
そうクレイトスの厳酷と切嗣の乾ききった冷酷を重ね合わせる、セイバー。
すると瓦礫の埋もれ、鉄骨で腹を挟み込まれたセイバーが主をついに発見した。
「アイリスフィール!」
急いで救出すべく駆け寄るセイバー。
その瞬間Cランクに匹敵する斧形の宝具がまだ、食い足らんとばかり、セイバーを追い越すとコンテナ積み場に暴虐の拳を叩き込んだ。
破壊エネルギーを纏った爆風が電灯をもいで、夜の帳に舞う。
宝具の威力に勢い付けられた、コンテナ屑が天より振る投石となり、むき出しにした

鉄の牙をアイリスフィールに食い込まそうとしていた。
セイバーは即座に宝具を解放、魔力を心胆で練り風王鉄槌（ストライクア）により迎撃しようとしたが…。
――駄目だ！近すぎる！アイリスフィールまで巻き添えを！
既に天石はアイリスフィールの顔面を足場として定めていた。
「―ALALALALALLALALALLALALAAAAAAAAAAAAAAAIIIIIIIIIIEEEEEEE《アラララララララララアアアアアアアアアッィ》」
喇叭（ラッパ）を数十管鳴らしたような鬨の声が奔った。
猛牛も宙を歪ませる如くの唸り声を上げつつ、天より降る石に雷神を纏わせ突貫した。
そして円形の爆風と発破音が、石を砂状まで解体したことを知らせると、ライダーが虚空へと高度を稼ぎながら、セイバーに叫んだ。
「おい！セイバー！とっととお前の主人を回収しろ！ここもじき崩れるぞ！」
「礼を言う、ライダー！借りをいずれ！」
「なぁに、戦場の花と麗人に傷をつけるのは王としても許容できんだけよ！」
命からがらライダーに応援で助命されたアイリスフィールを抱きかかえると、ライ

ダーに礼を交わす。
「では今宵の戦場はここまでだ！また剣戟を鳴らす時が来た時、存分に借りを返してもらおうではないか」
そういい残し、牛に甲高い鞭を刻むと、闇空へと颯爽に駆けていく。
空へ舞い上がって、一足先に撤退したライダー陣営は、ミニチュアサイズまで縮小された、崩れかけの埠頭で燻る煙と瞬く光を見下ろす。
「まったくとんでもない乱戦だったなぁ…余も既に経験済みだが”ガウガメラの戦役”よりよっぽど恐ろしかったわい」
――ガウガメラの戦い。
やっと戦場の身を裂く恐怖から出所したウェイバー・ベルベットはライダーがぽつりと口にしたガウガメラについての簡易な史歴を思い返していた。
紀元前３３１年。ダレイオス３世が擁するペルシア帝国と、イスカンダル…アレクサンダー三世が指揮するマケドニアギリシャ同盟が激突した。
騎馬、歩兵を合わせを数十万人を超える大軍勢が太陽照りつける砂漠で殺しあったのだ。
その迫力は場にいないウェイバーでも享受できたが、平然とそれより凄かった。と言ってのけるライダー。

――確かに。凄かった。いろんな意味で。
ガウガメラ１０回分を一気に味わされた、ウェイバーは雄として妙に格が上昇したとを鼓動より感じた。
そしてあの刺青のサーヴァント。
ライダーに対しての憎悪は地を裂くほどに足りぬと言った具合である。
こっちがトラウマ級の罪悪感を植えつけられるところだった。
「なぁ、ライダー…あの刺青のハゲ…お前の知り合いか？」
その疑問を受けて、ライダーは素っ頓狂な台詞で返す。
「はぁ？あんな神々が受肉したような戦士など知るわけないだろう！寡兵の時も言ったが、余は彼奴に惚れたのだ」
「余もゼウスの子を自称しているが、ゼウスになんて神、会ったことすらない！だが彼奴はまさしく雷神の生まれ変わりのようであった！」
そう、身振り手振り恋に酔う女子のような口振りに呆れ顔で正視するウェイバー。
「でもアイツ、お前に対してなんかヤバいほど敵意丸出しだったけど」
「問題ない！そしてこれは戦争である、奴が余を憎み、余は奴を寵愛する！それで良いではないか坊主！」
「無関心こそが毒なのだ！彼奴とはまた聖杯を巡り覇を争うことになるだろう、つまり

機会があれば酒でも一献交わし誤解を解けばよいだけの話よ」
そう征服王は高らかに豪笑を鳴らし、牛を遊ばせないように鞭を振るった。
――でもアイツ、ゼウスって言葉に恐ろしく反応してたような…。
今もあのこっち向けた憤怒で染まった鬼神の表情を思い返す。
まるで絵本の筆でしかない世界を現実だと認識する幼児が悪徳極まる年長者に血潮吹き出るホラー映画を強制的に視聴させられたら、背後に本当の白面を装着した１００人殺人鬼がチェンソーを持って処刑の唸りを上げる。
とはまた別の恐怖であり畏怖。ウェイバーを形容しがたい遠く、遠く深遠である畏れの沼の下へ誘なった。
恐怖の種であるはずなのに、体を悪寒で震えないのは、恐れと同時に沸き起こった荘厳さが中和の作用を引き起こしたのだろう。
決して肝が太いなどというレベルの話ではない。
一体何なんだ。アイツは…。本当に神様みたいじゃないか。
まだ序戦中の序。その疑問は後の聖杯戦争で明かされるだろうと、一人ごちた。
「そう言えば、刺青の戦士が聖杯に願う奇跡は一体何なんであろうな！彼奴は世界征服じゃ決して満足せんぞ！たぶん地理上の端から端…」
そしてライダーの惚れた戦士についての、のろけもまだ終わりそうになかった。

傲岸の覇王と獰猛な戦神の、争いというより人型鉄球を打ち込む作業風景となった倉庫街。

本来の船舶の物資移動を補助する目的を捨て去り、ついに飛沫を散らしながら海水に潜伏しつつあった。

地盤一帯は海水の浸食と、無慈悲な鉄槌を下す戦神の猛撃で砕けた瓦礫、コンクリート屑を沈没の口に飲み込んでいく。

あちこちで燃え盛る炎が水面を煌かせ反射した。

また同じように英雄王は今だ恨めしく抹殺の気炎を双眸に宿らせ、燃やし続けていた。

未だに脚部を拘束し、叩き付けの工程を止める気配も無く、王の金剛石如くの威信を潰さんとする下賤に嫌忌の剣で刺突しまくる。

「この我(オレ)をここまで陵辱するか…醜悪なる肉の怪物め…」

アーチャーは天の鎖でこの匪徒を這い蹲らせ、乖離剣で卑賤の不忠者を灰燼の残滓一つ余さず、寂滅する讒謗の絵面を脳裏に千回描くも、それを実行出来ずに居た。

当然、これらの兵装は己が比例すると認めた者だけに賜わす、ある種の月桂冠。

親愛なる友をこの屑の血で汚せる訳がない。

そんな矜持の狭間に押し込められ、苦悶の面体で塵を幾度も被る。
すると痺れを切らしたクレイトスは、自らの陣地に鉄球を釣る様に呼び戻した。
傲岸の王は汚水が混ざった塩水に顔を濡らしながら、崩壊した地面を摩擦する。
飼い主が命令を聞かぬ愚犬に首輪に付属するリードを、引っ張り上げどちらが上かを教え込む、犬として同等に扱われた事に、自尊心は枯れ木のように折れた。
だが当のクレイトスはそんな王の心中など、豚の交尾より興味を示さない。
横臥する黄金の王の、史上かつて誰にも触れさせた事のない、逆立った御髪を雑草を抜くように掴む。
アーチャーは崩落した自尊心をかき集めて修復する、真っ最中であったため胡乱げに事態を見送った。
そしてついにスパルタの戦神は血染めの神話を綴らんとせん、最後の仕留めに掛かった。
まるで家畜の血抜きをするよう、素手で髪を支点に、咆哮しながら首を捻じ切り上げようとしている。
「るあああああああああああああ!!!!」
するとー気に痛点が英雄王の意識を覚醒させた。
「貴様アアアアアアアアアアアアアアア!!!」

だが不敬の憤慨はクレイトスの狂気を篝火に薪を新たに継ぎ足した如く、加速させせる。

アーチャーのえび反りになって後ろに投げだした、脚部を両足で斧を落とすが如く踏み、釘付けにした。

クレイトスは頭を反らし、全膂力を弓兵の斬首ならぬ抜首に注ぎ込んだ。

地盤がスパルタ人の脚力とバビロニアの王の頑丈さに根負けし、爆ぜるような快音を出しながら固定した部分が沈下していく。

クレイトスは二の腕と見間違える、頬筋を浮かばせるほど歯を肉食獣のように食いしばりながら止めの鬨声を吼え猛る。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

さながら奇妙な処刑道具であった。人間が人間を器械仕掛けに命を削ぐ。まさしく血滴る神話の再演。

クレイトスは今、古今東西を平伏させた黄金の主を討ち果し、神話から王の名を除名しそうとしていた。

ついに英雄王の頸椎と首が泣き分かれよ、裂け目から血を噴出しようとした、瞬間。

――天の鎖（エルキドゥ）よ!!!!!

つまり、ギルガメッシュは〟別の意味〟でも折れてしまった。

そう宣誓すると、空間から割れて這い出た鎖の蛇が、王殺しをせんとす賊のクレイトスを天空より拘束した。

天の鎖。ギルガメッシュの朋友の名を冠した神をすら縛り殺す最上級の宝具。

高位の神性を擁するほど、凄烈に堅牢さを減らし増す。神に近く傲慢なる愚か者に制裁を加える牢獄。

最高神ゼウスの血を濃く受け継いだクレイトスは先程の激情を嘘のように停止させ、鎖に繋がれた罪人となる。

手堪えを感じた、アーチャーはついに不敵の笑みを漏らし、溜飲を下げた事により冷静さを幾分か取り戻して罪人に宣告した。

「これほどまでに我(オレ)の顔に泥を塗りつけ、憎悪した雑種はそうそういない。褒めて遣わそう」

クレイトスの兵装である、腕からブレイズオブカオスを叩き落とすと、足で侮蔑を表し踏みにじった。

もう既にクレイトスの命は王の掌に把握されていた。嬲るもよし、肉を少しづつ削ぎ落とす陵遅刑に処してもよかった。

だがギルガメッシュはその程度では満足せぬほど、殺しの手順を頭で組み替えていた。

やはり寸刻みで潰す、陵遲刑がいいか。一撃に消滅させる乖離剣がいいか。
機会は一度しかないのだ。この雑種は永遠に動けないのだから、じっくりと吟味しよう。
勝者だけに齎される、命を弄ぶ権利。
苦渋を飲まされ続けた英雄王にとってはとてつもなく耽美で心を蕩けさせる甘さだった。
散々不敬の畜生働きしたのだから、地を這う蚯蚓より苦痛を伴う扱いをしてやる。
それこそが王としての威光、威厳を修覆する正しい王道であろう。
そう英雄王が処刑方の熟慮の海に飲み込まれていた頃。
クレイトスの心中は死よりも暗く、深き谷底に伏せていた。
多々思うの自らの体内を循環するおぞましい液体について。
貴きスパルタの血。汚れた神々の血。多々憎む。
―ゼウスの血。
―汚らわしき血。
―どんな怪物よりも黒く薄汚れた血。
―認めぬ。
―私は認めぬ。

―決して。オリュンポスの神々は烙印を押しても。
―タルタロスの底に墜ちても。
―認めぬ。
―あの呪われた血を絶滅させなければ。
―それが私の…。
―そして救済への道はそこにあるのだ…。

そして、希望の日差しとは言いがたい暗がりの火を見つけると、クレイトスは堅牢の鎖に繋がれた手を解いた。

鉄を槌で潰した圧壊音は、英雄王の思考に氷水を掛けた。
振り返ると捕縛したはずの賊が奇妙な動きをしながら、破断を体で鳴らす。
それは絶望の調べであり、クレイトスの憤怒の熱さ。
「あ、あり得ぬ…我(オレ)の友が…」
打って変わって狼狽した声を発し、万が一を考え俊敏にクレイトスから距離を取った。
この雑種は曲がりにも、神性の血が入っていた。だから鎖もあれほど堅牢に機能した

はず。

と推論を積み重ねようが答えには一向に届かない。

またゆったりとした足取りで王の領域へと入り込む、クレイトスに近衛隊の金色砲門が横並びに展開した。

「――打ち鳴らせ、我の宝具たちよ（ゲートオブバビロン）！」

指揮官より砲撃を下知された、主砲群がいっきに宝具の弾頭を飽和爆撃した。

そしてクレイトスが取ったその、退避行動…。

類似的に言うならば、突貫工事に近い所業であった。

最後に残存した、崩落すれすれの割れた地盤に手を伸ばすと捲り上げ、一気に傾斜度を上げられた倉庫街のコンクリートグラウンドは急ごしらえの坂となった。

そして持ち上げられた地盤はビスケットよりも脆く、吹き飛んだ複数の瓦礫が宙で降灰しながら盾となり誘爆した。

そして区画の傾斜を味方につけ、一陣の風となったクレイトスは草原を疾駆する豹のように海水に沈んだ焦土を早駆けする。

「――おのれええええええええええええええ!!!!」

だがアーチャーの首を狙う狂戦士を、射殺す策は尽きていない。王は指揮棒の手を翻すと、幅一杯に射程範囲を横隊の陣形と挟むように縦にも黄金の列は形成する。

下の線を消した正方形。

故に戦略など拵えて、逃避する場所はなく鏃(やじり)は天の鉄槌として宝具の豪雨が血で染めるだろう。

そして孔(あな)より、斧槍剣メイル鉄球フレイル刀又槍銃剣が顔を出し砲門が次弾を装填したことを告げる

古今東西東西南北の兵装の原典はクレイトスに照準を向けた。

幅一杯に射程範囲を次は狙撃するのでは無く面で潰す。

逃げ場など無い。クレイトスは身を剣山として供することになる。

—道など作ればいい。

スパルタの血脈は、こうクレイトスに囁くと紅きより暗い血を沸騰させ、血液が心臓から送り出されたと共に、叡智を授けた。

岩盤抉りて爆ぜ飛ばす煙は一帯を終幕のように告げた。

それを目視した英雄王はさらに恐慌状態に身を震撼させた。

黒煙にはまだ影が残っている。未だに。死なず。死せず。

何故？何故

？何故？何故？何故？何故？何故？

アーチャーの思考は疑問による疑問の混乱で蹂躙されていた。

それを嘲笑うがように答えは単純明快であった。

直接、射出しても抜剣された双剣（ブレイズオブカオス）が跳ね飛ぶ宝具を補足していた。

喩えるなら触手。

鉄剣が鞭を振るうように宝具を撥除け、取り付き、方向を強制修正させる。

そしてアーチャーの自爆圏内の半歩まで辿り付いた、クレイトス。

王殺しの逆賊は…

――――再び玉座へ奔る。

駆け、もう十歩。

双剣が弧を切って、首を刈り取ろうとする。

もう半歩。

三。

二。

逆鱗に触れたように一閃の光沢が闇夜を照らす。

クレイトスを一度封殺すべく、王は天より鎖を召還したのだ。

再度、鎖は風を切ってとぐろを巻きながら、狂戦士の首を狙い、絞首しよう試みる。

しかし、その餌食に掛かったのはクレイトスではなく…ギルガメッシュであった。
過程は他愛も無い。
首に掛かりかられた、鉄鎖を捻じ切り、新たに長鎖を確保した狂戦士。
そして背後に滑るように周り込み、腕を交差し、背を扼殺の支点として蹴り上げ、その友の手でアーチャー（エルキドゥ）を絞首刑に処した。
もちろんギルガメッシュには神性が宿っているが、その硬度を増しているのはクレイトスによる化け物じみた腕力の所為である。
天の鎖は、壊れない程度の耐久力でクレイトスを補助した。
「がああああああああああああああああああああああああああああああ……」
英雄王は言語として解せぬ獣よろしくの狂声を上げながら、それを扼殺か破断かの断末魔として永遠に記録しようとしていた。
ほんの一欠片の自尊心による心中か、乖離剣による恥の勝利か。
傲岸の英雄はついに針の海を下とする、断崖絶壁まで追い詰められたのだ。

強襲．ｐｔ５

間桐雁夜は魔力供給のポンプ役を任じられことによる故の、擬似的魔術回路の激流紛いの要求によっての疝痛に身悶えしながら下水道の汚水に臥していた。
クレイトスが接敵した後、急いで他のサーヴァントの襲撃から身を隠すため、屋上から初期から予定した下水へ虫による移動を行った。
魔力が他の魔術師と比較して雀の涙ほどの雁夜でも、なんとか命辛々、辿り付く事が出来た。
そして雁夜の安住地である下水道は、暴発した宝具の嵐から奇跡的に回避していたのだが、僥倖に恵まれた安全地帯でも、狂を発する痛みと命危うしの格闘に脂汗を飛ばす。
だがそんな激痛の最中に置いても、度々込み上げる哄笑を抑えきれず、噴出しながら芋虫のように丸まっていた。
「時臣…今どんな顔してるのか顔を見てやるよ」
幻想の遠坂時臣をそこに召喚し、妄想に耽溺する雁夜。
当然、監視カメラ代わりに使役しているのは、間桐家のお家芸である虫である。
虫の視界を通じて網膜に映すのは、アーチャーを倉庫置き場へ殴りつけるクレイトス

の暴虐の瞬間であった。
だが視神経と接続した、虫に雁夜は不満を持った。
あの常に優雅ぶった顔をどんな焦燥感に崩して、震えてるのか―。
それがまったく見えなかったからだ。
だが目に見えずとも、想像しただけで雁夜の胸に心地よい風が吹いた。
――ざまぁみろ！時臣ィ！
雁夜はもちろんここには存在しない負け犬、遠坂時臣に対して高らかに勝利の凱歌を謳い上げるのだった。
俺のサーヴァントは間違いなく最強だった。
これだけは確実に証明できた。
そしてアイツさえ居ればどんなサーヴァントが居ても負ける気しない。
だが、その前に俺の体が持てばの話だが…。
クレイトスの短所を嫌というほど理解した、雁夜は這いずりながら、バッグを漁りビニール製の小袋を出す。
その袋の中には銀錠剤が収納されていた。
――オピオイド系鎮痛薬。
有効成分はケシから抽出した化合物モルヒネ。

主に回復の見込みがない患者の緩和治療などに処方される、法的に許可された麻薬である。

要は安楽死が認可されていない、医療界での代替という訳だ。

癌より悪辣な刻印虫による病状の倍速進行は惨禍を極めた。

臓硯が万が一に備え、持たせた薬剤ではあるが、雁夜は言いつけられていた用法量を超えた頓服のルールを破り捨てていた。

この鎮痛剤がどれだけの副作用を持つか、要約で知ってたはいたはずだが。

そして、またぶり返して来た心身蝕む苦痛から逃避するように、雁夜は躊躇いも無く口内に錠剤を放りこみ、カプセルすら危うい固形物を嫌う胃に水で無理やり流し込んだ。

傍目からしたら激痛から遁げ出す、マスターとは思えない、無様な姿に映ったかもしれない。

だがこれも少しでも魔力を捻出する臓器として生き延びる下策だったのだから。

雁夜の身体はクレイトスの戦闘で消費する夥しい魔力に心臓を粉砕されるに等しい、最上級の苦痛を味あわせた。

それもそのはず、サーヴァントはゼウス神の直系として生れ落ちたオリュンポスの住人である。

従僕であったアレス神を抹殺するその巨躯から求められる魔力は、元々ストック分があるにせよ、この序戦の大決戦では心もとなかった。

素質を考慮するならフェラーリを赤子に買い与えるより愚かだったかもしれない。

雁夜の脆き、医学を魔術で欺いた砂上の楼閣の身体を、支柱として現世に繋ぎとめるのは、今、クレイトスがアーチャーに叩きつけている同じ憎悪だった。

そしてクレイトスの予想以上の戦果と興奮が、ささやかな報酬として脳内麻薬による微量の痛みを阻害している。

これでアーチャーに敗北していたら、憤怒と屈辱のショック死は免れなかったかもしれない。

運の女神に愛された雁夜はクレイトスの進撃を眺望しながら、苦痛による喘ぎと愉悦の嗤いを交互に繰り返すのだった。

鎖で金音が狂を発し怒りを代弁する。
絞首する鬼神の狂戦士は、怨恨を哭いた。
ここまで英雄王を糾し憎悪を吐く理由はなんなのか。
理由など当にない。復讐の釜の底に這い蹲る、一匹の獣。
猛る獅子が餌の分別などする必要がない。
ましてや怨敵の血が混ざった、狩場の標的である。
例えるなら、偶然クレー射撃の的が親を殺害した憎き殺人鬼の親類だとして、それを嗤笑するような素振りしたら、屑肉に成り果てるまで銃弾を叩き込み続けることと一緒だった。
　故に万物は比肩することなく君主の怒りの刃を胸に押し付けられていた。
「ゼ　ウ　スウウ」
　既に英雄王の傲岸にも慢心にも、眼中に無い。

神々への怨讐を種子として撒くには腐葉土と水が必要だけであった。
宣戦布告の芽が今咲かさん、とするための道具。
それがこの英雄王(ギルガメッシュ)であった。
クレイトスは哭いた。ただ三千世界を、ただ我らを小さい蟻として睥睨するオリュンポスの憎しみ足らぬ神に。
「がっ、あああ……エ、ア…よ…」
切断されかける首は、なにやら呪詛めいたことを呟く。
だがある意味は呪詛としても、絶対的に滅ぼすべき敵として認めた宣言としても、二重に機能していた。
金の霞が王の篭手と沿うと、宝物庫より出現するのは天地暴く破壊の根源として供覧す、封を解かれた天地開闢の鍵。
海(アプス)は割れ、太陽(ウトゥ)は失墜し、この世の全てを書き連ねた、宇宙の記録層である天啓の書版(トゥプシマティ)はこの星の滅亡を予言す。
バビロニアの王が命じるまま、絶滅の焔が口を開けた。
——乖離剣。
「創生を語れ、天地乖離す開闢の星(エヌマ・エリシュ)…」
筒状の削岩機とも言える、刃の無い奇剣が回転する。

破断の空刃がそれを帯びると、彫上げが紅く咆哮した。
闇空が白色の柱の如き光芒が地を照らす。
海洋が切り開かれ…。
海のカーテンは開放され、底の釜は水を呑み干す。
モーゼがシナイ山に辿り付くために、海を拓いたように。
美しき光景だった。
遠漁中の漁師は眠気瞼を瞬くと、白柱が埠頭を串刺しにするのをただ口をだらんとして、眺望していた。
荘厳たる神話が現実に降誕するの魅惑された面で見守った。船ごと崩谷の漆黒に誘われたことに気づかず。
スパルタの血がクレイトスに緊急避難を令する。
闘争本能が瞬時に冷え切り、クレイトスは回避のためアーチャーを水面に投げ捨て、反対方向に飛んだ。
とうに放たれた破滅の因果は、新都のそうそうと並ぶビル街へと白き鎌を下ろす。
鋼の高塔が中心より爆ぜ上がり、炎塊が弧を描き、海洋に水しぶきを上げて着水した。
まだ終わらない一閃は解体の台風を連れて神の掌というべき爆轟が建築物を一気に薙ぎ倒し、欠片と屑に砂時計が落ちるように粉砕していく。

そして、冬木の闇夜が幕間を落としたように白夜と変貌した。

そして共に海へ飛び込んでいた、クレイトスはこの崩壊の原因であるアーチャーに止めを刺すべくひたすら泳ぎ続ける。

瓦礫と破片で阻害される津波が入り込み、完全に沈没した元倉庫街域を捜索するが…。

居なかった。

クレイトスは既に獲物を取り逃がした失態を悟る。

歯噛みして当てようの無い憤怒を肺腑に叩き込み叫喚した。

これにて今宵の第一戦は終劇。

崩落した区画と、燃え盛る街を残して。

齢、８０近く重ねる老神父…。
兼第四次聖杯戦争の調整を司る、監督役である言峰璃正はあのアーチャーは撃ち放った虐殺によって被災した事によって生じた問題の収拾。
すなわち神秘の秘匿による隠蔽工作に追われていた。監督役に措ける最重要任務は、外部に魔術の痕跡を喧伝しないこと。
やることは山ほどあった。何も知らずただ被災者を救うべく奔走する”一般人”のレスキュー隊の折衝。
神秘を知る一部の中枢の人間には予め、情報だけは入れておいたが魔術と無関係の役人である。
ただの紙切れに従ってマニュアル通りにしか事を進められぬ指示待ち人間。
その無能さと、無関係の澄まし面をしていられる事が羨ましかった。
年齢的に考えたら縁側で茶でも啜っているのが年相応だったはず。
だが一度その異常事態（聖杯戦争）に関わっている璃正ような人間はさらに貴重であり、そう簡単に両機関が手放すはずもない。

そんな首輪を付けられた老犬はこの危機を打破するために知恵を絞る。
まずは、徹底的な痕跡の除去するための人材収集と、部隊編成。まずあのレスキュー隊を差し止めることから始めた。
酸素マスクを付けた隊員を除いて、魔力の残滓を吸入し、救助隊もまた被災者の列を増やすでけであろう。
まさかこの千年に一度の大震災に足るだけの機材があるとも思えない。
そうごちると、急いでその国務機関の人間に命令を飛ばした。
それを終えると、どっと疲れを響かせながら、樫材の長椅子に腰掛ける璃正。
次の瞬間、部屋を魔術的通信機の着信音で鳴り響かせるのはあの飼い主からの伝言だった。
あまりにも火急な協会の命令が璃正の老体に鞭を入れた。
何でも魔術協会からは緊急の応援部隊と涙ばかりの資材を遣したらしい。
勘弁して欲しかった。魔術協会の名も知らぬ唯我独尊を貫く魔術師を遣されても手に余るだけである。
自分が知っている限り、盟友の倅である遠坂時臣のような人格を持つ魔術師は稀有だった。
その何処から引っ張ってきてるのか、魔術の神秘(アインツベルン)の一端である資金だけ置いて帰って

欲しいと出来もしない願いを請う。
　このような緊急事態だ以外は、仏丁面を貫いて自前のコネでやりくりしろと注文してくる癖に。
　憎憎しげに呪うのは自らの信用を切り売りする、知人から知人への自転車操業で冬木の保安を担ってからである。
　怒りが一段落すると、外で部屋を叩く風切音が一室を揺らした。
　――来たか。
　急いで、来訪した魔術師達を邂逅すべく扉を開いた。
　アッパーライトの鋭利な光を玄関前を刺すと、璃正は眩い光に眼を閉じざる負えなかった。
　小型ヘリのブレードから発せられる突風の如き、旋回風が辺りの木々と砂を巻き上げ激しく乱舞させる。
　よろよろとヘリが着陸すると、扉が開閉し闇色のタキシードを纏う長髪の男が璃正に近づいた。
「こんばんは。私。この度の応援部隊として協会より使わされたコルネリウス・アルバと申します。以後お見知りおきを」
　男は自己紹介した後、恭しく礼を示す。璃正もそれに返礼した。

「こんな老骨ですみませんな。私は第四次聖杯戦争の監督調整役に務める、言峰璃正です。遠方からご足労をおかけしたようで」

意外にも璃正の言葉が朗らかなのは、アルバと名乗った男が意思疎通できる人間として認識しただからだろう。

「いえいえ、とんでもない。第三次も歴任したマスターコトミネ…お会いできて実に実に光栄だ。あなたの忠犬…もとい忠君っぷりは協会内でも十分評判となっていますから」

声の抑揚を弾ませながら、さらりと嫌味をったらしく皮肉ったアルバに璃正は繭を一瞬動かすと、前言撤回の意を腹で決めると、あえて聞こえないフリをした。

「それでは用件を承りましょうか。あなたも世間話に興じに来た訳でもありますまい」

「勿論、では協会からの贈り物を」

アルバが指を鳴らすと、外套を被った同業者と思わしき魔術師が、扉からアッシュケースを運び地面に落とした。

「それは…？」

胡乱げに問う璃正。

「もちろん現金（マネー）です。あぁ少しこちらもバタ付いていましてね。金庫番の手違いでドルやらが混ざっていますが…」

「――――ひとまず一億円あります。どうぞご確認ください」
璃正は急いで駆け寄り、魔方陣が刻印されたアタッシュケースをその場で開放する。
あった。現金が所狭しと詰め込まれており、手に取って数えてはいなかったが、重量で実感した。
一体…この好待遇は…？札束を手に取りながら、璃正が協会より寄越したあまりにも度が過ぎた対応、贈り物と名の大金に懐疑心を噴出させる璃正。
「マスターコトミネ。一応勘違いして貰っては困りますが、貴方への自身への退職金でもプレゼントでもありませんよ？ちゃあんと然るべき場所でお使い下さい」
それをまるで乞食に金銭を分け与える貴人のようにアルバは嘲笑した。
「あぁそうそう、これも忘れていた。おい」
再び同業者と思しき黒尽くめの外套者に何かをまた運び出せようと指令を飛ばした。
だがその配送を下知された者は、鎧櫃の身に余る漆箱を重量で運びだせなかった。
地面に固定されたように必死に上げようとするが、掴んで離すを繰り返す。
「重量加減魔術も使えんのか、呆れ果てるな。無能の雑魚が」
アルバはそう痺れを切らしたように、吐息混じりで指を弾くと、外套の魔術師はガソリンを被った如く不可視の火種で燃え上がった。
突如襲った業火に面見えぬ部下は叫び声を撒きながら、地面を転がり回る。

当たりまえの如く、火は消化せず、神秘の魔術は無駄な足掻きを嗤うように火の勢いを止めない。

「あなた…！一体何を!?」

当然、アルバの思考を読めぬ璃正は怒声を飛ばし問い詰めた。

「あぁお眼汚し失礼。いや何、こんな屑未満の魔術師なんて、この先居ても無能は邪魔になるだけでしょう?だったらここで処分した方が、我々の為だと思っただけです」

「敵の弾より味方の無能がよっぽど恐ろしいなんてのはよく聞きますし、早めに摘み取ったほうが本人のためだと私は考えますが…」

「――如何かな!?諸君!」

そう、アルバが歌劇の台詞のように大声で髪を振り出す。そして顔色伺えぬ黒外套の部下達は無言で上司の蛮行を首肯した。

「まぁそういうことです、マスターコトミネ」

まったく一ミリも理解できぬ思考。まさしく魔術師の特有のエゴイズム。

璃正は同情と悲哀の念で、ぶすぶすと黒煙も燻し立てる無能な部下に眼を配す。

顔を隠していた外套を焼いて燃え残りである、ケロイドと頭蓋半々となったレア加減で焼却された顔に吐き気を催した。

その焼け残った長髪と耳につけたイヤリングからして女だったらしい。

璃正は、天におわす主よせめて安らかに彼女の魂を眠らせたまえ。と死体に鎮魂するのだった。

「さて、さて、忘れていた。これでしたね」

アルバは無能を理由に処刑した、部下の事だと当に忘却して、指を振って中に鎧櫃状に宙へ飛ばすとその重みと共に地へ打ち鳴らした。

漆色の箱を掌で滑らすように撫でながら、吟遊詩人は口ずさむ。

人とて善心を持てば悪逆の誘惑を断ち切らん

―Ｅｉｎ　ｇｕｔｅｒ　Ｍｅｎｓｃｈ，ｉｎ　ｓｅｉｎｅｍ　ｄｕｎｋｅｌｎ　Ｄｒａｎｇｅ，Ｉｓｔ　ｓｉｃｈ　ｄｅｓ　ｒｅｃｈｔｅｎ　Ｗｅｇｅｓ　ｗｏｈｌ　ｂｅｗｕｓｔ

すると爆竹を丁度鳴らしたに近い、発破音を響かせると、箱は花弁を開いて黄金の雌しべを剥き出しする。

闇を照らす金塊。インゴッドがそこにあった。

「９９．９パーセント純金のスリーナインです。ご安心ください、魔術で生み出したイーリガルな贋作ではありません。ちゃあんと真性刻印（シグネチャ）もありますから」

そうアルバが指を刺すと、そこには確かに魔術協会が所有する金塊であると保障する釘のような物体が小さく埋め込まれていた。

ある程度技術に達した魔術師がこうした金融資産を増やすために、純金などの希少価値を持つ財貨をホンモノに組織細部まで、大変酷似した贋作として偽造することは多々あるらしい。

だがそれを野放しにしては、次次と送り込まれる金による、価値暴落によって外の世界の経済性を破綻させかねない。

金の価値が朽ちたら、次は銀、プラチナという順に連鎖的な希少資産騰落もあり得るからだ。

そして一抹の神秘すらを露出させることを嫌う機関がそれを、許容する訳がなかった。

そのために一部の中枢に居る人間との取り決めで真贋を判別する手段を作り出した。

それが真性刻印（シグネチャ）と呼ばれる偽造防止技術である。

「こんなモノを私に押し付けて、協会は…一体何をする気だ！」

璃正は先程までの冷静さを捨てて、アルバに向けて困惑を怒鳴った。

アルバはその老骨の醜態を弄ぶかのように、惚けたように今更説明し出す。

「おや？申し上げておりませんでしたか…？これはこれは失敬極まりないご無礼を。お詫び申し上げます」

と相変わらず芝居掛かった台詞で璃正を苛立たせた。

「答えて下さい！それがなんなのかを！」
答えを欲する璃正にアルバは封殺の言葉を投げかけた。
「魔術協会及び聖堂教会は、やっと条約を交わし終えました…誠に残念なことです」
璃正には何を言っているのか、アルバの説明が足りない故に理解できなかった。
するとアルバはポケットから、羊紙を取り出し裁判官が判決を言い渡すが如く読み上げた。
「――過去三回、執り行われて来た、聖杯戦争は…」
「――今回の四回目で無制限凍結を布令す」
「――現段階で発生している冬木での第七百二十六号聖杯は、大小問うことなく、ただちに解体し、サーヴァントを使役し聖杯を目的とした戦闘行為またはマスター同士の戦闘は恒久的に禁ずる」
「――そして監督者はこれを正式に参戦者のマスターに布告し、終戦させる義務を帯びるとする」
「――よって、聖杯戦争の終結と聖杯の破棄を両機関は全会一致で支持し、この布令の尊守を履行しなかったマスター及び関係者は両機関の罰則法則に反したものとし厳粛な処断を下されるものする」
「と、のことです」

耳を疑った。
聖杯戦争の終結…？何故今のこの段階で…？
「一体何故です！何故魔術協会と聖堂教会は聖杯戦争の凍結など！」
熱を帯びて吼える璃正を尻目に、アルバは平然と水を掛けた。
「さぁ？私は上の意向なんて知りません。何らかの事情があったのは考えるまでもないですが…」
「我々の外部の人間には理由など必要ですか？訳の分からない事を慮っても意味などありません。ただ我々は自分の仕事をするだけでいいでしょうに。マスターコトミネ」
璃正はアルバの冷めた物言いに反論できなかった。
理由を知らされる立場でもないのだから、粛々と仕事をしろ。
と孫とその祖父代まで懸け離れた青年に論破されたことに唇を噛んだ。
名ばかりの監督役。一体私は…。
璃正が屈辱の沈思に震えていると
アルバは腕時計に目をやると仰天したように叫ぶ。
「あぁ！これは不味いぞ、予定時間を大幅に超過してしまった。それではマスターコトミネ！互いに身魂を尽くして、任務に望みましょう！それでは」

そういい残すと再びブレードの回転を上げたヘリに乗りむ。
扉を横に閉鎖したかと思うと、また唸る風音に紛れながら叫んだ。
「最後にもう一言！この工作費を仮に遣い残した場合は、残存した分、確実に返却してください！老い先が短いからと言って、間違っても着服なんてしないで下さいよ、マスターコトミネ！」
そう皮肉を投げると、勢い置く扉をスライドさせ、アルバの搭乗を確認したヘリは木々を風圧で押し倒しながら、その”任務”を行うべく空へ舞い上がっていった。
璃正はアルバ以外の同じ型番のヘリが被災した新都方面へ向かうのを発見した。
夜風を皺入った顔で受けながら、置き土産にしていった工作用の手間賃を見やる。
また、どれだけ協会は魔術師を展開したのだろうと、アルバの言う意味の無い問答を心中で繰り返すのだった。

余波

遠坂時臣の屋敷にして、戦闘の最前線である古雅と豪奢を漂わせる洋室は絶望に染められいた。

部屋の趣は王侯貴族が居館として根を下ろしそうな、ヨーロピアン風の家具と調度品で統一されていたが、今では中世の死刑を待つ大罪人の牢獄の雰囲気を醸し出していた。

原初の蛇の脱皮の化石を手際よくなんの諍いも無く入手し、最強のスペックを誇る古王ギルガメッシュを召喚した時臣。

既に聖杯の在処は己の掌だと自認するほどの順当な滑り出しだった。

だが、何せ召喚したサーヴァントは傲岸極める覇王。

思うがままに独自行動する術を持ち、冬木の散策の土産には激情振るうまま宝具を誇示した。

挙句の果ては、最終の奥の手にして秘奥である乖離剣(エアー)を解放したのだ。魔術に無関係な一般人すら瓦礫ごと埋葬する大虐殺によって神秘を了解とする魔道の暗黙は崩壊していた。

時臣による”遅すぎる判断（呪令）”によって一部の暴発で収まったが、神が鍛造した兵器は新都を直撃し、今もなお無辜の市民を焼いている。

優雅さの欠片も無い立ち振る舞いと、王の激情を畏れる臣下が起こした不幸（ヒューマンエラー）であった。

あれだけ綿密に編み出したプランもこれでほど崩壊した。水面下では共闘関係を結んでいた、綺礼…。

つまりアサシン陣営のアサシンも宝具の乱射によって何体か死亡したらしい。

撃鉄を起こす必要の無い支離滅裂な行動によって、貴重な友軍まで殺したのだ。

王に対する畏怖によって重大な過失を発生させた、時臣は己の死に対する押し殺せぬ恐怖を呪いながら震える手で紅茶を啜った。

いつもなら茶の芳醇な風味と清香が心をより、冷静にさせてくれるはずだが…。

今ではまだ斬首前の処刑者の慈悲である、人生の僅かばかりの残滓に注ぐ一杯となっていた。

最後の晩餐ならぬ最後の一杯。

ストレスで唸る心臓を抑制しようと、一気に紅茶を飲み干す。

結局、滝のような汗をかいたこと理由とする水分補給にしかならなかった。

憂鬱が溜息を促すと、部屋で黄金の霞が人を模って顕現する。

時臣は自宅が爆撃を受けたように、瞬時に椅子から離れると恐怖の源泉に臣下の礼を取った。
「英雄王――御疲労甚だしくご無礼の極みを。御体に差し支えたことを誠にお詫び申し上げます」
妙な日本語だったが、王の罪科を態度だけで免れるための智慧、能才が溢れる時臣が脳漿を滾らせ紡ぎ出した唯一の解決法であった。
審判の主はじっと顔を伏せる時臣の様を、澄み切った空でも見つめるよう、見下ろした。
「時臣――苦労を掛けたな」
罪人は耳を疑った。
「王…王よ、今、な、なんと…」
あまりにも、常の態度と先程の死線を繰り広げた憤怒の闇魔とも違う、人格が乗り変わったような豹変に流石に混乱した。
「聞こえなかったか？苦労を掛けたなと述べたのだ」
「時臣、貴様も中々に忠君であるぞ。そう自分を辱めるのではない。それは王の臣下として相応しくない」
王による憎悪の制裁はいつしか、臣下の労いへと変化した。

「め、滅相もありません！私の不注意と怠慢による王へのご無礼は重ね重ね処刑にも値する、無能ぶりには自害でお詫びしたいほどに…」

翻った態度は何故か、時臣をあれほど恐怖していた刎頸をわざわざ望む愚か者へと退化する。

このギルガメッシュの天地転がし開闢を起こすほどの、変貌にはある種の理由があった。

――殺意。

一見、真意と態度とでは矛盾する言葉。

では何故、殺意はこの朗らかな態度を作り出したのか？

それは激情を重ねに重ねた臨界を超過した噴火が、一つの断固たる目的によって冷却され結晶化したからである。

その結晶が今の冷静さだった。

ダイヤモンドの組成構造が炭素でしかないように、またこの部下を労う良君もまた憎悪を光らせる宝石は、クレイトスによって生み出された石ころに過ぎなかった。

――確実に、正確に、慈悲なく、天命の如く。

目的を遂行するための、思考は一人でにパズルの如く組みあがった。

そして癇癪などの無駄な感情をフィルタリングして王の最大の障害である慢心を切

除。

つまりクレイトスは殺すべき敵を育ててしまったのだ。

寛容の賢君は一枚剥げば、轟かせるマグマを燃え滾らせ、煮えたぎる憎悪を放出するであろう。

利己的なロジックはそれを封じ込めるための、自動調整期としても作用した。

「我(オレ)こそ、愚かだったのだ…真に心を置く臣下の意見すら聴取しない暴君…。恥ずるべき存在だ」

「それでもこの暗君の我(オレ)とそれでも聖杯を求めてくれるか…? 親愛なる臣下。遠坂時臣…」

時臣は真の忠誠足る王の春風のように暖かな労わりで涙腺を緩めた。

「我が王は貴方にして、他なりません。英雄王。絶対の忠義は連綿として緩むことなく、王の命ずるがままに…大祖のシュバインオーグに誓って」

そう感激の奮えを滲ませながら、臣下の礼を改めて取り直すと、絶対的な献身を誓約した。

「そうか、ならば我(オレ)もお前の期待に応えるとしよう。時臣…。ありがとう」

あくまで臣下の礼は生前の模造品に対しての敬意でしかなかった。

だが、感情を爆発的に波立て、走らせるのは紛れも無い真の忠勇の欲求。

石の虎像が一夜で虎に生まれ変わっていた如くの現象であった。
ついに最後の言葉で滂沱の涙を決壊させ、声を押し殺しながら感嘆に打ち震えるのだった。聖杯戦争の当初の目的を健忘するほどに。
実際、時臣の感動は死刑台から解放された反動によるアドレナリンの大分泌が原因であった。
そして賢王の心中は、粗悪な感動に夢中な時臣には聞こえなかった。

ケイネスの許嫁、ソラウはランサー陣営の本拠地として居住していた、高級ホテルを抜け出し、密会に最適な僻地へと呼び出されていた。
新都に巻き起こった乖離剣の洗礼は、ここからでも眺望できる。
ソラウは燃え盛る新都を青ざめた面持ちで景観を見つめていた。

ランサーの箴言が無ければ、ソラウは灰燼としたセンタービル街の惨状に遭遇していたであろう。
そして瓦礫の破片で潰れて死ぬか、魔力束で死体すら残さないかのどちらかであった。
ある意味ケイネスの宝具の事故がソラウの窮地を救ったのだ。
それでも事態が逼迫している事には違いない、何故ならマスター、ケイネスは宝具の直撃すれすれを食らったのだから。
はっきり言って生存は絶望的だったが、ランサーがまだ現界可能な事から推測するとまだ光はあった。
ケイネスは契約の令呪を、ソラウは供給役の魔力を変則的に分担する召喚法は、功を奏した。
だがその素晴らしき功績を神童は成果を享受できず、死の瀬戸際を彷徨っていた。
外套を翻したような風が一陣を吹き上がると、ランサーが到着したことを知らせる。
死体未満生人以下の炭化しかけた、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトを抱えて、急いで地に下ろす。
ソラウの視神経がそれを読み取り、視覚野が受け取るとソラウは堰を切った如く遺体未満に取り付いた。

「ケイネスゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」
ケイネスの精悍な顔立ちは無残にも焼き焦げ、どう見ても火葬場で中途半端に焼却された死体にしか見えなかった。
ソラウは吹き零れる涙をケイネスに落としながら、必死に治癒魔法を施す。
だが精々生焼けの皮膚に戻るだけで、生命の理は魔術師ケイネスに死の審判を宣する。
けれども、どこから肩で腕なのか判別できない部位がゆっくり持ち上がると、ソラウの髪を撫でた。
肺は圧壊しており、呼吸すらままならない口は何か三文字を口ずさむと閉じ、手は糸が切れたように落ちた。
——時計塔の神童。
——アーチボルト家三代目当主。
——ケイネス・エルメロイ・アーチボルト…。
死亡。
既に遺体として認知された炭塊を抱きながら、ソラウは泣き叫びケイネスの名を呼び続けるのだった。
だが、その瞬間ソラウの右手には完全な刻印が血涙の赤が燐光を発しながら、宿った。

どういうことであろうか。
ランサーを使役する証の令呪は、ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリに受け継がれたのである。
顔が焦げようと、維持でも最後まで守り続けた右手。
それを遺産にするが如くケイネスの鉄の意思はソラウに分与された。
結局の所、ケイネスの真意は分からず、令呪が相続された理も不明だった。
ただ凛然と輝く令呪はケイネスを象徴するように、煌きを放ち続ける。
ソラウは静かに死体から立ち上がると、無言で折屈するランサーに直言した。
「私、ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリは…。三代目当主。お隠れになったケイネス・エルメロイ・アーチボルトの意思を引き継ぎ、この聖杯戦争でマスターとして代行することを宣誓します。」
「ランサー…私と一緒に聖杯を勝ち取り…夫を…ケイネスを…蘇らせて…」
毅然な態度とは裏腹に、言葉が震え熱い雫が目じりを通って、落ちる。
「このディルムット・オディナ…。自害にも等しい我が失態により討ち果たされた主君を取り戻すため。ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ殿…あなたを我がマスターとして今生の誓いを」
「我が始祖の名に懸けても、死を賭しても、全て聖杯をあなたの願いのために捧げます」

「マスター…」

ディルムット・オディナは絶対の神事（ゲッシュ）の如く契約を賜った。

全ての歯は噛み合った。

ソラウは夫を失った悲劇と共に、心底で冷え切った計算を弾き出す自分を俯瞰していた。

―ここで泣けば同情してくれるぞ。

―触れてくれるぞ。

―守ってくれるぞ。

―抱いてくれるぞ。

ソラウの獣性が人間の仮面を被って、ひたすらその手段と褒美を語り掛ける。

その予想は的中していた。夫を喪失した未亡人という立場は騎士の琴線へ確実に触れ鳴らすだろう。

ケイネスと過ごして来た、今までの記憶が黒い愛欲と牝としての性（サガ）に虫食いされていく。

正統な目的を得て、絶対的な忠誠を得たソラウは冷え切った自分を、ただ見つめていた。

最後に自分を呼んだ、夫を殺された復讐心が巧妙に偽装の城を構築していく。

ランサーもそれに例外ではなかった。忠君の騎士という中身は水だろうが、なんだろうが己の忠誠心を振り撒けるならば、木偶でも何でもよかったからだ。

主を喪失した未亡人を守り、美しき今生の誓いを果たす。

まさしく美麗な忠勇素晴らしき臣下の鑑。

これほど絶好な舞台はなかった。

一つの目的で繋がれていながらも、深層に秘めた欲望を蠢かせた、一人のマスターと一人のサーヴァント。

奇妙な縁故で結ばれた、陣営がまた誕生したのだった。

払暁

そこは月光も遮光する母なる海。
悠々と泳ぐ彩色豊かな海魚達は、今日も人知れず生存競争に明け暮れていた。
そして、その紺色の子宮に…衛宮切嗣も居た。
宝具の砲火に細切れにされた、コンテナクレーンが飛沫を立てながら沈んでいく光景は、まるで海中を突き抜ける砲弾と見間違えるだろう。
それもそのはず、爆風に煽られて沈降していく人工物の残骸は、一度でも接触すれば、人体に重大な致傷を負わせるだけで済む事故ではない。
静謐の深海に切嗣の身を捩る、くぐもった遠泳音だけが孤独に鳴り響く。
――海に漂う赤を放出しながら。
恥も捨てた死に物狂いの遊泳で、残骸の散弾を回避し続けるが、その動きはまるで、かなづちが溺死寸前でもがいているようにしか見えない。
その通り、切嗣はこの蒼海を己の墓標にしようとしていた。
体内時間を魔術によって法外な速度へ加速減速させ、人体を近代医学の枷から解き放つ固有時制御（タイムアルター）。

身体を二倍速に変動させた事による代償は当然ながら血管を痛めつけ、おまけに骨身染みる寒冷の海に突如、飛び込んだ事でアドレナリンが心拍を荒れ狂う波の如く加速させたことも起因して、心臓をショックに近い状態へと深刻な状態へと悪化。

さらに致命的なのが、魔力の洗礼を受けた残骸の破片が、切嗣の腹部へと冷酷に突き刺さっていた。

三つの鉄槌は切嗣を魚類の撒き餌に成り代わらせようと、今も獰猛に体内で暴れ続ける。

切嗣は酸欠とポンプ機能を辞職しかける心臓によって、失神と蘇生を反復横跳びする。

意識薄れ行く海中でついに死の影を肌身で実感し始めていた。

脳内では早々と過去の記憶が再生と停止を繰り返し、自らがこの死地へと足を踏み入れた足跡を辿る。

破顔しながらケリィと呼ぶ褐色の少女。氷を掴んだように冷たいグリップ。糸が切れた人形のように崩れ落ちる父。

そして煙を噴出しながら高度を下げていく航空機。

―ナタリア…。

ふとその名前を心中で口ずさむと、あの記憶の奥底へと収納されていた風貌が一枚の

写真のように鮮明さを取り戻す。髪型はプラチナブロンドのショートヘアー。煙草は常に口から離さない。

利己的な性格だったが、自分はその中に暖かさを感じていた事を覚えている。

「ボウヤ」

まるで隣で語りかけてくれたような気がした。

そう、彼女も同じように海の藻屑となって死んだのだ。

どのような感情で海底へと死の道を突き進んでいたのかは知る由もない。

だがその近い感覚を体験することであたかも、同化した錯覚を覚えた。

所謂、走馬灯と呼ばれる現象であるが…。

この現象は本来、生存方法を過去の記憶から捜索する最後の抵抗である。

だが切嗣は朦朧と意識の最中で不思議と心地よさを感じていた。

まるで余命を全うした棺桶の死体であった。

棺に飾られた懐古と共に海底へ沈んでいく切嗣。

だがその幸福な瞬間を切り裂く濁音が身体ごと攫っていった。

濁流がひたすら自由を奪い何処かへと、運び去っていく。

聴覚は豪水音だけを聞き取り、四肢は水の手をレールにただ移送されていくのみである。

そしてなにか背に衝撃が走った。その反動によって流路が河川敷の域に転換させると、浅瀬の尖った砂利と礫石に摩擦し移動が停止する。

誰に起動させられたか、生存本能が一時的に体を支配すると、切嗣は河川から水分を吸った重い体を引き上げ、無意識に河川敷へ倒れこんだ。

「ナ――タリア」

ただ、そう一言呟いて。

雁夜の精神の絶頂は止まるを知らなかった。

刻印虫の身体を責める激痛も忘れ、その一時の闘技場となった倉庫街の死闘に釘付けとなっていた。

それもそうであろう、あのアーチャーを狂戦士は、なんと敵の宝具を己の武器として扱い、玩具のように本人には屈辱の極みであろう行為だが、クレイトスの熾烈な振舞いから、ひれ伏していた。

常識から外れた奇妙な展開の連続に雁夜は抱腹絶倒を我慢できず、漏れた

憫笑が下水を一周して反響する。

「いいぞ！バーサーカーァ！そいつを殺せ！今すぐに！」

狂気が蔓延する様態に興奮を漲らせ、喀血しながら処刑の下知を飛ばす。
ついに時臣が己のサーヴァントに負け滅ばされる。
その渇望して止まなかった瞬間がついに訪れようとしていたが…。
おかしい。
唐突な中継の切断に雁夜は呆然とした。
外界に繋いだ映像は線が切れたように、ホワイトアウトしていたからだ。
目に送られるのは、白で塗りつぶした画板と代わらない壊れた映像だった。
考えられる事態から、雁夜は先ほどの悦の有頂天から突き落とされるように青ざめた。
「まさか、俺の眼は…」
そう白濁した眼に手を翳し、落胆するが、一縷の望みに掛けるように、急いで虫とのリンクを落とす。
だが、今度はホワイトアウトした視界は、下水道のこびり付いた汚泥が周辺を埋める根城を映した。
つまり視界は正常に機能している。
まだ盲目になった訳ではないのだ。
と、ほっとまだ五感が瀬戸際で繋ぎとめられている事実に安堵する。

となると、この事故の原因を究明するなら使い魔の蟲が死んだか、なんらかの要因でノイズ的な不具合なのかの二択に搾られるが、未熟な雁夜では判別が出来なかった。
それを脇に置いても、せっかくの処刑劇を些細なミスによって中断された雁夜は苛立ちで舌を鳴らした。
そして、おぼつかない足取りで地上に繋がるタラップに手を掛けた。
わざわざ逃げ込んだ安穏の場所だったが、肝心の絵が閲覧できないのなら無用の長物であると考えたからだ。
だが、その音でマンホールを押し出す、手を止めた。
地響きが如く反響する怪音。
地震を疑ったがこの何かと激突して引き起こされたような震動は、自然現象とは思えなかった。
すると重低音をけたたましく打ち鳴らし、微振がついに破裂音へと駆け上がった。
突如左の下水菅から雪崩の如くの大量の質量が押し寄せる暴虐の音は、雁夜を凍らせた。
—まさか。
雁夜の脳内が簡単な類推をした。
そのまさかに回答を提示すべく、下水道を粉砕して鉄砲水が一気に雁夜の首まで上昇

する。
「み、水!?」
そう戦慄の叫びを上げると、洪水としか形容できない、荒れ狂う汚水は雁夜を生贄を選択し、逆巻きの激流に巻き込み、押し出した。
濁流のトロッコは穿った穴を高速で突き進みながら、陥没した穴から雁夜ごと排水した。
口内が汚水の腐敗した吐しゃ物の味から、塩辛い感覚に染まると、雁夜は海まで流された事を悟った。
ただでさえ動かない足を蛸のように駆動させて必死に海面へと浮上しようとする。
だがそれを許さぬ激流は呼吸を奪って、瓦礫と共に流し出すのであった。

雁夜は道中、石状の物体が偶然クッションとなり、激突の衝撃で方向転換したことによって浅瀬に流木の如く流れ着いていた。
喉が海水で犯された不快感で、えづき、むせ返りしながら岸へと体を移す。
どうやらコンテナ集積場の隣で、海洋へと注ぐ未遠川に辿りついていたらしい。

僥倖だった。
運が落ち目ならあの冷海で残骸を伴って水死体となっていたかもしれない。
それにしてもあの下水道まで海水が流れて込んできた、ということは宝具がこっちまで飛んできたのだろうか？と軽く推理をしながら、河川に沿って歩き続ける。
現状、雁夜一人ではあまりにも危険な移動だった。
早い所、サーヴァントと合流し安全を確保するのが先決だろうが、気絶からまだ、朦朧とする平衡感覚と意識の覚醒を取り戻すために、とりあえず歩き脳に刺激を与える。
そして雁夜の目に飛び込んできたのは、同じ河川敷に流れ着いた黒い物体であった。
遠目からはただのブイにも視認できなくもない。
だが近づいて確認してみると、それが明らかに人間である事が分かった。
「この人も同じように巻き込まれたのか…」
流石に聖杯戦争中とは言え、不幸な被害に巻き込まれた”一般人”を看過しておく訳にもいかない。
一応死亡していないか、黒コートを着衣した男を仰向けに転がし静脈を取る。
微弱だが指に脈が感じられた。どうやらまだ死には到っていないようではある。
だがこの冷たい河川敷で寝かせていたら、確実に死亡させることになる。
そう考えた雁夜は己も重病人であることは、忘却して肩に切嗣の手を回して人目があ

る所へ移動させようと試みる。
だがその機会を右手の紋様が無残に切り捨てた。
紅く剣を模したような刻印を凝視する。
まだ令呪がはっきりと雁夜の甘い良心を砕くように、手に残存していた。
「コイツ……魔術師（マスター）――！」
即座に現物から察知した雁夜は叫びかけたが、なんとかそれを噛み殺す。
急いで担いだ切嗣から身を離そうとするが、マスターを暗殺できる千載一遇のチャンスに巡り合ったことに体が硬直する。
憎き時臣ならまだしも、顔すら知らない男を殺せるか。
という一般の感性による疑問が殺しに体性がない雁夜を詰問する。
外気の寒気と緊張による身震が判断を鈍らせた。
殺すにしてもどういう手順を踏めば、殺害できるのか。日ごろニュースや書籍の情報を総動員して頭を巡らせる。
その結果、一旦体を地面に下ろして実行することにした。
選択した方法は絞殺。
切嗣の首を祈るように両手で鷲掴みする。
「悪く思うなよ…俺はやらなきゃいけないんだ…俺は…」

荒い息を一緒に弁明の言葉を搾り出し、絞め上げる。
だが、力がまるで入らない。
まるで筋肉が溶けたように、腕力が消失していたからだ。
これがあくまで、一般の世界で歳月を過ごして来た男の限界なのか。
―俺にはやれる。
―オレニハヤレル。
だが雁夜はそう心身に言い聞かせ、歯を食いしばって力を取り戻そうとする。
だが筋肉が弛緩したように力が入らず、首を撫でるようなマッサージになってしまう。
時が過ぎれば過ぎるほど、玉のような汗が噴出し、本人の意に逆らって体が言うことを利かない。
―雁夜。
誰かが自分を呼び捨てた。
声の主が誰かとは分からなかった。
いや、分かりたくなかった。
だが、その禍々しく聞き慣れた声は、どう足掻いても、脳が知っている。
「所詮、魔道から逃げた軟弱者には無理な話だ。卑怯者は卑怯者らしく一般を享受して

いればよかったものの…」
　風の撫でる音が、そう呟いた気がした。
　土壇場で敵の殺害を実行できぬ、愚か者に誰かが嘲笑を投がけていた。
　その瞬間…他者の殺人を慄きで矛止めしていた、殺意が可燃物質を浴びたように燃え爆ぜる。
「時臣ィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ」
　そう絶叫しながら腕力は堰を切ったように取り戻し、切嗣の喉頭を締め上げた。
「ぐぶっ!?」
　だが、水死体のように沈黙していた切嗣の膝が雁夜の鳩尾に打ち込まれていた。
　水月に叩き込まれた膝蹴りは威力は、意識を一瞬奪い去る。
「こ、コイツッ…!」
　さらに、マウントを取った形の雁夜の体を利用し、親指の爪で眼を差し込んだ。
　眼球を抉られる法外な激痛に絶叫しながら、あえなく河川敷に倒れ込んだ。
　それは、雁夜を散々を苦しめて来た発作的な疝痛を勝るとも言える、神経を穿り返される痛みは雁夜の知らぬ痛みでもあり、当然の反応であった。
　一連の反則超過の攻撃は、ＣＱＢを初めとする、軍隊格闘術の要である急所の集中。
　一般人が習得しても、ルール無用の鉄火場だけで活用される禁術である。

「まったくプロファイル通りだな。間桐雁夜…」
「助けて貰って悪いが、悪く思わないでくれよ」
形勢を逆転した切嗣はトドメの獲物（コンテンダー）のグリップを掴むみ、悶絶する雁夜に照準した。
つもりだった。
手が空を切る。
「無い」
思わず口に出すほどの醜態。
既に切嗣の礼装と兵装は海の藻屑へとなっていた。
「最悪だ」
予備のナイフすら紛失する徒手空拳の状態を認識した魔術師殺しは追撃の手を緩めない。
仰向けの重病者の顔面に一発踵を見舞い、無残にも昏睡させようと、さらにもう一発踵で顎を弾き出し、意識を狩った。
間を空けずとどめの絞め技（サブミッション）を仕掛けようする。
魔術回路は疲労でほど機能しないが、魔術は使うまでも無かった。
そして、見事、絞首される側が入れ替わる。
首を抱き上げる体勢に移行し、縄と変貌した腕が首に絡むのは、裸絞め（バックチョーク）。

本来なら呼吸を閉鎖させる窒息させる技であるが、切嗣が行っているのは全体重を落として、頚椎を絶ち折る絞めである。
雁夜は水辺に上がった魚のように口を開閉させる。
苦しい。苦しい。息が出来ないだけでここまで苦痛だとは。
そういっその事、そのまま意識を飛ばされた方が遥かにマシだったとこの最中で思った。
締め上げが喉を潰すような狭窄に達すると、酸素が回らず、意識が混濁に溶けていく。
雁夜の頚椎をへし折ろうとする切嗣はさらに力を込めた時…。
背に焼けたように熱く燃えるほどの刺痛が走った。
その被害を被ったのは…切嗣であった。
雁夜は絞められる形で不敵に笑みを漏らす。
「どうした…折らないのかよ」
「……しくじったか」
切嗣は切り裂かれる苦痛を察しの言葉と共に吐いた。
恐ろしく、単純な、戦法であった。
切嗣が懸命に雁夜を葬り去ろうと大技を掛けてる最中に、翅刃虫を背後に忍ばせる。
そして背を無防備にするであろう、絞める瞬間を狙って襲わせた。

伏撃の初歩中の初歩。
こんな子供染みた戦術に引っかかったのはこの番狂わせの事態や、武装の不在などの混乱した精神がもたらしたモノであろう。
百戦錬磨の魔術師殺し言えど、驚愕に相次ぐ驚愕のドミノが敗戦を倒した偶然の敗北。
戦場は絶えず変化する自然。
誰かそう言ったか。雁夜は改めて言葉をかみ締めた。
切嗣が身を投げ出して場から逃げるのと、１ｃｍも満たない肉薄した翅刃虫の堅牢な顎が、軟い背を食い破るのがどっちが早いか。
双方ともこの戦いの終焉を予想する。
「運が悪かったんだよ。アンタは」
潰された雁夜の眼窩から血が滴り落ち、地面を染めた。
また切嗣も同じく背の刺し傷より、死を予期した如くの鮮血が下に流れ出る。
「頼み事がある」
翅刃虫が背でまだかまだかと給餌を待つ、最後の沈黙を破って切嗣が口を開いた。
「何をだ」
「お前に最後の遺言を頼みたい。もしも会ったら長髪の白人の女性か、黒髪の女に伝え

ろ」
「衛宮切嗣は死んだ。これだけ伝えてくれ」
「僕を殺した罪悪感に駆られるのなら、他人のせいにしてくれて構わない」
そう頼み事を終えると、片手で煙草を取り出し、火もつけず咥えた。
「悪いが、俺が無駄な事をそんなことするとでも?」
雁夜がそう吐き捨てる。
「やるさ。僕だったらいちいちバカ正直に遺言なんて聞かず殺してるからね。お前のお人よしは命取りだな。間桐雁夜。」
見えない紫煙を口から吐きながら、苦笑する。
「お前は…遠坂時臣に勝てない」
そう切嗣は確信めいたように呟く。
「食え」
その冷え切った言葉に、迷い無く処刑の命を拝領した蟲は歓喜する。
「少し疲れた」
羽音が狂ったように乱舞した。
骨が砕け折れ、肉が裂ける咀嚼音は見なくても、聴覚だけで、それがどうなっているかが理解できた。

血飛沫が遠慮なく飛び交い、奇妙な事にその地点だけ血の雨が降ったような惨状に河川敷が変化した。
「約束は守る」
もう衛宮切嗣は居ない。
鮮血に溺れた外套と、血の雨を浴びた男だけが居た。

まだ仄暗い朝焼けにまどろんで、黒が蠢く。
「フム…まぁ貴様にしては及第点と言った所かの。雁夜…」
そう、誰に向ける訳でもない感想の独り言を放つと、紅色の空模様に黒点が舞って散った。

動脈

ウェストミンスター宮殿の大時鐘が荘厳な音を響かせる。
ちょうど午後八時を回った頃であった。
人気が疎らながら、人口八百万を誇る大都市ロンドンも、もうすぐ眠りに付こうとしている。
大きな出来事を置き去りにして。
時計塔が本来の機能、本来の占有者の姿を知る者は少ない。
街を闊歩する住人たちも、顔に深い皺を刻み込んだ古老も知らぬ、秘密のベールに閉ざされた時計塔。
その最先端で最新な、古来より世俗から隔離された、建築物の廊下でにわかに、影が一人が疾り冷たい靴音を響かせていた。
――――名は…。
弾き空けられたドアが老朽の悲鳴を上げる。
「遅いですぞ、ロード・バルトメロイ!アナタから呼びつけたのでしょう?」
「申し訳ありません。道に迷いました」

長い年月、人の進入を許さなかった証の舞った埃を払いながら、円卓席の上座に着いた。

道に迷ったということが、方便であることにはこのホールに呼びつけられた誰しもが瞬時に理解した。

否、この女が忘れるものか、と。

その通り、女帝の説明は真っ赤な嘘であり、彼女の脳がこの程度の記憶ミスをするわけがない。

いくらこの円卓室がこの数百年で数度としか使用されなかった、隠し部屋である事実を無視してもだ。

そう、苦虫を噛み潰したような顔で、出席者は忌々しく胸中で唾を吐いた。

「幾分使わなさ過ぎた部屋ですので、埃が酷いですね。まぁ事後連絡ですぐ終わるのでお気になさらず」

もう連絡は全て終わった如く、顔周りの空気を払いながら言い放つ。

「アナタ方には本来関係の無いことですから」

女帝は軽く、唖然とする出席者の顔を一瞥すると、ロードはバルメトメロイを除けば誰一人いない事に気付いた。

全て学部の代理参加である。階位を比較すれば、色位が順で最高権力者であった。

――成る程。何故、名前が浮かんでも顔が一致しないのかよく理解した。私の記憶力の減退ではなくて安心だ。

無駄な瑣末情報をまったく記憶しない己の脳の仕様を今更、バルトメロイは一人ごちる。

「関係が無いのなら、わざわざ呼びつけないで頂きたい！」

憤慨する一人を顔をまじまじ眺めると、階位と顔の造詣は一致するものだと勝手に感心するバルメトロイ。

「それは失礼しました。確かにアナタ達は無用な長物ではなく、一時的な連絡役の部品としての価値は十分評価しています」

火に油。爆薬に火。

悪意からではなく純粋な好意からの煽りであった。

当然の如く一斉に立ち上がり、怒り狂う寸前…。だが、一同は怒りよりその言葉に凍りついた。

「時計塔院長を代理して魔導元帥より下名します。我ら魔術教会はこれより本時間より、無制限の戒厳令を布告。規定に従い厳戒態勢を取って下さい」

一気にホールが動揺とざわめきに支配された。

「な、何故ですか!?」「まさか、聖杯戦争の所為ですか！」「馬鹿がそんな訳ないだろう、

第三次クラスでも布告されなかったんだぞ！」
　各々、爆発したように事実を求めるがため口を動かす。
　その狼狽ぶりはまるで核ミサイル発射に脅える民衆のよう。
「静粛に」
　かき消さされるほどの声量だったが、鞭を打ったようにホールが凍る。
「聖杯観測所の詳報によると、五十万四百三十四個分に相当する聖杯が冬木市にて観測されました」
「今までの最大クラスの超大型聖杯です。今回で四回目ではありますが、これを受けて聖杯戦争の無制限凍結。及び小聖杯の確保が優先事項となります」
　衆目の衝撃とは裏腹に天気予報を伝えるが如くだった。
「過去のイースターエッグの玩具と比べると些か悪ふざけが過ぎますね。火遊びで世界を崩壊させてもらっては困ります」
　円卓席の一人が死期間近のような表情で弱々しく尋ねた。
「で、私たちはどのように…？」
「もう既に下しました。先遣隊は飛んでいるはずです。繰り返しますが、アナタ達には関係ありません。連絡だけお願いします」
「私たちの仕事の邪魔ですから」

そう言い終えると、女帝は手を翻し、ただ置物となった魔術師の詰める部屋を後にする。
埃臭い酸素を脱して、新鮮で冷えた空気が肺を通すと思考が透明になって気がした。
そして、場合によってはクロンも動かさねばならないかと沈思しながら再び廊下を往く。
重い鐘の音が響いた。
その音色は果たして、世界への滅亡の一篇か否か。

〜〜
蟲が蠢く。どこに？体に。
手のひらに。腕に。肘に。
太ももに。足に。足指に。
まるで蜜に集る昆虫綱。まるで死骸に群がる蟻。
例え方は幾らでもあった。
ただ人体でここまで蠢いてるのに、何故ここまで何も感じないのだろう。
生理的嫌悪も、鋭利で脚部で蹂躙される痛みも。
何も無い。

良く目を凝らせば、視界が黒い。目の霞ではなく、物体が目を覆っている。
ごりっと、頭蓋骨に音が伝わった。目に蟲が入り込む。
眼球を突き破って、眼窩を通り抜けて、するんと頭の下に落ちた。
少しづつ蟲が溜まっていくような重みはある。
痛みは無い。何も感じなかった。
――おじさん。
聞き覚えのある甘い声が脳天を刺さったように、反響し木霊した。
痛い。体中で蟲が肉を啄ばむ。
不感だった体が火を帯びたように。
――燃えて弾けた。
砕かれるような、肉を切り落とされるような。比喩が浮かんでは、それを通り越す激痛が暴虐を爆発させる。
「痛い！誰か助けてくれェ！」
叫べども、泣けども誰も手は貸さぬ。声を聞かぬ。
――雁夜君。
また声が聞こえた。
帳に包まれた視界が光を再び得て復活した。

もう痛みもない。完全に激痛の拷問から開放されたのだ。
春の日差しのような暖かな木漏れ日が眩しい。
「――さん！俺やったよっ！――したんだ！もう――なくていいんだ！」
皆どうして俺を変な目でみるんだろう。何故、笑ってないんだろう。
そういえばなんだか、目もおかしい。
まるで万華鏡のように、三人の顔が無限に反射していた。
多数のテレビが一斉にチャンネルを変えたように、沢山の三人が困った顔をしている。
「ミロカリヤ」
気付いた。複眼だ。
手を近づけた。
触覚。
蟲だ…。
「がああああああああああああああああっ!!」
己の絶叫に驚愕した。
そして身体が融点を持ったような灼熱の地獄に耐えかね、また絶叫をした。

「がああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

痛いとはあくまで生存状態の五感である。

呼吸するたびに蘇生と死を繰り返してると断言してもいい、激痛を殺す激痛はある意味では、至福であり地獄の底辺であった。

「ギャーギャーと喧しい。耳が遠くなったワシでも鼓膜が破れそうだわ」

滝のような汗で濡れた顔を向けると、騒音に悩む老人が佇んでいた。

「ジジィ…何で…聖杯戦争は?というかここどこだよ…」

「ついに自分の家すら忘れたか。こりゃ重症じゃな。ワシより早くボケてしまうとは我が倅ながら情けない…」

なるほど。ここは俺の部屋だ。今気付いた。だが俺の手に付いてる金属は…。

雁夜の言うとおり備え付けのベットには不釣合いの装置であった。

足と手に四個づつ杭から伸びたチェーンが装着されている。

「何だよこれ…」

「お前が激痛で暴れるからだろうに。こうでもせんと背骨を自分の手で折ってたわ。たわけめ。」

そう聞くと有難い施しだったが、長時間拘束されていた事で残りわずかな筋肉が固まって酷い苦痛だった。もちろんアレに比べるなら、痛みの内にはカウントされないだ

ろうが。
「それより…ジジィ。体の痛みが通常より酷い。耐え切れないどうにかしてくれ。」
流石に音を上げた雁夜の苦悶顔で少しばかり愉悦を堪能した、臓硯だったが、困ったような顔で返した。
「だがのぉ。貴様あらかじめ、渡して置いたあの薬は使ったんじゃろ?」
あの薬とは癌患者用の鎮痛薬である。
臓硯の計らいで戦闘中の支障をきたさないように、持たせて貰った薬物ではあるが、雁夜は既に用法量超えており、通常の肉体なら死の瀬戸際に立つ服用をしていた。
「あぁ…まぁな」
「じゃあ無理じゃの。死にたくないなら諦めろ」
「おいマジで頼む…違う意味で死にそうだ…」
既に哀願する雁夜を楽しむ臓硯の娯楽化していたが、ふと何かに思いついたような表情から一変、喜色満面の邪悪な顔に変貌した。
「しょうがないのぉ。可愛い可愛い倅の頼みだからなぁ。無下に突っぱねるほど精魂が冷えたわけでもない」
「ほれ、負荷中の負荷の端っこじゃ。有難く飲め」
臓硯の腰が意思を持って自らを引き千切るように跳ねると、四肢が分裂して触手のよ

うな機関現れた。
手腕代用の機関は、極小の錠剤を器用に掴むと、瞬時に雁夜の口元を目掛けて、喉に差し込んだ。
「んんんんんっ」
「我慢しろ、お前もう固形物は喉を通らんのだろう。胃まで届けてやらねばなるまいて」
「おっごおごごごお」
引き抜かれた触手でも、えづきながら、無理やり胃に突っ込んだ薬剤が効果を発現し始めたのか、次第に体の激痛が潮が引いたように霧散していく。
「効いてきたか?」
「あぁ…普通の状態がこんな極楽なんて…」
「だが面妖じゃのぉ」
さも不自然が起こった如く、臓硯が首を傾げる。
その姿はある種、わざとらしく見えるだろう。当然。わざとである。
「何がだよ」
「死体が痛覚を持つなど、なかなかユニークだとは思わぬか?雁夜よ。どこぞの学術者が喜んで欲しがりそうな検体だと思うの」
綺麗に生えそろった歯むき出しにして、渇いた地面の皮膚が歪んで、狂笑する顔は、ま

さに悪魔としか形容できぬ生理的嫌悪であった。
「はぁ?だから刻印虫が俺の代わり生命機能を維持してるって話だろ。タコが出来るほど聞いた」
　それに引きつっていたが、痛みが取れて余裕が出てきたのか少々苛立ちを隠せずに居た。
　それもそのはず、臓硯の物言いはまるで…雁夜が化け物のような言い草だったからだ。
「刻印虫は死体を維持せぬ。死骸に変わったら蟲の餌にしかならん。それもそのはず、刻印虫は死体を生かすのではなく、死体に近い生者を命を繋ぐのが役目であり、魔術回路の新設は副産物」
「例えるなら刻印虫は自転車の補助輪…前輪がパンクしようが、進もうと思えば進めるだが前輪、後輪が潰れればどうやって進む?何故走れる?生理学に反しようが、あくまで補助は補助…完全に死滅したら直すものも直せない…」
　臓硯は芝居ぶって部屋を散歩する。
「何が言いたい…吸血鬼」
「なぁ雁夜よ。人は何を持って死と定義する?」

「医学的見地言うなら、脳死…小脳及び大脳、脳幹の死滅。心拍停止呼吸停止で血液循環が内臓に行き渡らぬ長時間停止…」
「これでもまだ一部には死ではないと否定する一派も居るみたいじゃが…脳は半分で生きられるのかのぉ?」
俺の脳みそ…?
背に冷たい物が走った。頭部を恐る恐る触れて確かめる。
とりえず頭に穴は開いていない。
「カカカカカカカカカカカカッ、頭に穴なんて空くか、普通っ!」
「冗談だ冗談」
背を叩かれた雁夜はようやくタチの悪いジョークに巻き込まれたと気付いた。
「ちょっ!お前っ!」
臓硯の襟首を掴もうと立ち上がるが、軽業で避けると窓の外へ逃亡した。
「ほれっ、とっとと栄養剤でも打って来い」
一瞬、ほっとしたような、気がしたが、結局短命なのは変わらないのだろう。雁夜は開放された朝の心地良い風に身を委ねると、食事代わりの栄養剤を求めて部屋を出た。
屋敷の大屋根に腰を下ろした臓硯は懐より、一枚のプリントを空に透かせると放り捨てた。プリントは風に乗ってどこかに投棄されるだろう。

そして満足げに登り行く太陽に微笑みを投げる。
まだ真の血族とは呼べぬかな。雁夜よ…。
「これを言ったら怒るかのぉ、カッカッカッカ」
どうしても言えぬ、最後の隠し種。この味は俄然時間を掛ければ美味くなると確信する。
「ん？」
臓硯の割れた皮膚が、瞬時に殺気の圧を感じ取る。
ルーフを蹴ると宙転すると、背筋に沿って、突風に近い閃光が奔った。
目標は腰を下ろした場所に打ち込まれていたが、臓硯を狙った獲物が未だに衝撃で上下に振動していた。
そして、役割を終えた剣が砂のように消失すると、黒色の柄が音を立てて坂を下り、庭に落ちる。
だが、寸前で臓硯は自分を狙撃した殺意の証拠を足で拾い上げた。
そして、まじまじと観察する。
「なるほど。聖堂教会が何の用か知らぬが、警告の意か。こんな無言の圧力では禄に会話も出来ぬ様子とは見た」
再び圧が複数の圧が臓硯の背を刺す。

軽く数えれば、三十前後。屋敷を完全に包囲して円形の方陣を組む万全を期す有様である。

「この老人をここまで苛めてくれるとかなかなか可愛い奴。どれ挨拶でも…」

だが臓硯の遊びはすぐに中断されることになる。

聖杯戦争の全マスターを含めた、統一した驚愕、脳を撃ちぬかれたように。

教会に設置しておいた、使い魔を通じて。聖杯戦争に参戦する、全魔術師に向けられた放送はもちろん雁夜にも伝わった。

「――第四次聖杯戦争はこれの時をもって終結とする…」